立教大學新聞
発行所 豊島区池袋三丁目 立教大学新聞学会
振替 東京 70852
電話(983)0111—2内線97
発行人 野口定男
毎月廿日発行

高級D・P・E スピード仕上
月光堂
立大新聞学会 広報課 他各部 専属御用
TEL (982) 1065

寄附行為改正成る

松下総長

松下氏、再び選ばる

総長選挙　大学教職員による公選

前総長の任期満了となつた六月三十日、本学初の後任総長をきめる選挙が行なわれ、松下正寿前総長が再選された。これにさきだち、総長選出方法をめぐつて三年以上もの間紛糾をつづけた寄付行為が大幅に改正された。これによつて長い間叫ばれてきた学園の民主化もようやく第一歩をふみ出したわけである。そこで本紙では、今度の総長公選をめぐつて、改正された立教学院寄付行為、総長選挙規定、後に残されている問題点などをさぐつてみた。

前総長の任期満了も間近かい六月二十三日、総長候補者推薦委員会（別項参照）が開かれた。その結果、細入藤太郎（二般教育部長）、菅円吉（文学部長）、河西太一郎（前経済学部長）、松下正寿（現総長）、佐久木順三（元総長）の五氏が総長選挙候補者に推薦された。これにもとずき過つて選挙公示が公布された。

選挙は六月三十日午後一時からタッカーホール講堂においておこなわれた。投票は公選制によるものとない新しく作られた選挙規定（別項参照）による二百四十七名の選挙人によつておこなわれた。しかし一回目の投票では誰も規定による有効投票数の三分の二以上を得ることができず、続いて直ちに再投票がおこなわれたが、再び票が割れ三回目の投票で松下前総長が再選された。

選挙人は、理事、教授、助教授、職員、学生代表、校友代表、学院代表、学院職員代表、学院学生代表、校友代表、学院職員代表、学院学生代表、校友代表、学院職員代表、学院学生代表、校友

借金の返済が第一

―松下総長に聞く―

◉総長に再選され、荒し当つての人事の刷新については？

「人事問題については現状維持が望ましい。ただ経済学部長が、自分の研究と学生部の業務との両立に困難を感じ、辞めたいともらしていたのは聞いている。私としては経済学部の不満はないし、彼の留任を望んでいる、後任など考えていない。

◉高校校舎と空いた校舎は？

立教高校の移転は三月末迄に終らし新学期には間に合わせたい。

空き校舎はいづれ中学、大学の両方が改装して使用することになっている。

しかし、教室がふえたからといって学生数をすぐに増加させるわけにはいかない、学生数がふえれば又色々と諸問題も起り得るし、大学としても、経営面と同時に教育面の充実化を合わせて考えねばならぬからむやみと増加も出来ぬ。

◉医学部新設の噂を聞くが。

むろん医学部はあった方が良いし、私も現時点加賀院と実際に具体的な問題を話し合ったり、前米の時にも米国現公会の医師達とも話し合ってみたが、これというプランもなく現状では設備資金などの面でも実際問題としてむづかしく、急いで医学部を設ける必要もないと思う。

◉最近、理工学教育の振興がいわれているが工学部関係は？

「現在の日本において理工学教育を重視するのは当然だが、工学部の新設となると資金面の点から困難であるし、現在の理学部と工学的要素をとり入れてより充実した理学部にすればこれで十分だ。

また、将来は、原子力を中心とした研究課程を設けたい、そのの形は色々とあるが今は研究中である。

◉いよいよ原子炉が具体化されたが。

「国内の法的手続は七月二十九日に完了した。今はゼネラル・アトミック社との契約書の作成中である。契約を十月中にしても炉の完成は十力月程かかるから、武山へ着くのは来年の秋頃だろう。研究所の建設は契約成立と平行して行なう。武山の土地問題も九分通り解決した。

第一原子力グループとその関係だが、立大グループと技術面については共同研究も行われている。

また、このグループから五千万円の寄付を受けるが、それに米国現公会より三千六万ドル（一億三千万円）の寄付を加えて建設資金にあてる。運転資金は外部からの支給の予定は全くなく、立教のみで調達せねばならぬが、その見通しは現在のところない。

◉原子炉の建設や図書館の新築等で大分資金が必要だと思うが

「図書館建設費は全部借入金である。米現公会より年間一万二千ドル支給されるが、これは現公会の信徒の寄付に頼るのが現状だ。

◉最近文部省から学生部の強化という噂が出ているが。

「具体的な通知はまだ受けとってないが天下り式命令にはむろん盲目的には服従しない、〝強化〟といっても学生部に警視庁的性質を加えるのには反対だ。

◉終りに再選にあたっての今後の抱負を。

「別にどういうことはないが施設の拡張よりも借金の返済が先決だ。そのための授業料の値上はむろん考えてはいない。今後は内容をより充実して、よりよい立教を作っていきたい。

秋の立教スポーツ展望

硬式野球

東京六大学野球秋季リーグ戦は、十二日神宮球場で華やかに開幕した。六大学選抜ブラスバンドの演奏で、春の覇者早大を先頭に立・法・慶・明・東の順に入場。国旗掲揚について、早大木次主将の天皇杯返還、山本連盟理事の開会の挨拶、選手を代表して早大木次選手の宣誓等があって、開会式を終了。気高慶大体育会理事の始球式で、第一戦の立―東戦を開始し、向う二カ月間に渡る熱戦の幕は開かれた。

立・東一回戦は、東大岡村投手の健投に苦戦はしながらも、森滝投手の好投、浜中・高林・小西等の快打により2対0と東大をくだした。しかし二日雨にたたられ行なわれた二回戦は、東大打線が猛打を振い、森滝・石川・安井の三投手から十安打を奪って二点を上げた。それに反し本校はヒット十一本打たながら凡プレイが多く2対一と東大に六シーズンぶりに敗れた。

三回戦は期待の新人石川が東大を無安打・無失点に抑さえるという好投を示し、5対一と破り勝点をあげた。なお石川投手の無安打記録は、リーグ戦史上十五度目であり、無安打・無失点記録は、昭和二十八年秋の早慶三回戦に樹立した慶大河合投手につぐ二度目のものである。

ところで、春五連覇を目前にしながら無念の涙をのんだ本学野球部ナインは王座奪回を目指して二十日間ほど北海道に遠征し八月中旬リーグ戦への総仕上げ強化合宿に入った。今年の合宿は打撃に重点を置いたというだけあって、内容たっているようであるが、特に浜中・高林・小西・杉本・浦部・種茂等は調子が良いらしい。

投手面では、練習中に右手の甲を痛め練習入が遅れた森滝が立・東二回戦には打たれたものの、一回戦に好投したところからみて、春同様の活躍は期待出来よう。また五代が今シーズンは少し大りすぎ気づかれていたものの、別に調子は悪くはないらしい。それに立東三回戦に好投した新人石川・稲川・安井も好調なのでかなり働きそうだ。

次に述懐書と試みた一問一答をあげてみる。

―皆非常に調子が良い様ですね。

辻監督―（笑いながら）当通だよ。悪くはないがね。（と、とぼける）

―合宿では特に打撃に重点を置いたそうですね。

辻―野球は打たなきゃあ負けだからね。ワシは、打つ選手からドシドシ入れるつもりなんだよ。これは何処のチームでも同じだろう。

―五代が少し大りすぎたそうですが調子は―

辻―冴して悪くはないよ。良くもないけど。まあ普通だよ。五代が悪いと人は言うけど、それじゃあ他のチームが五代を絶対に打てるかと言えば、そうとはいい切れんよ。

―沢本主将が常時出場しないというどのナインに与える影響について、

辻―そういう影響というものはないと思う。むろん、調子がよければ使うよ。

―左翼には丸山、青野等、元来内野の選手を起用するようですが

辻―打てるチームにするためには仕方がない。

―守備のほうは心配ないですか。

辻―ウシはフライを捕れば良いと言っている。ヒットになる球を捕れれば言うておらんよ。（とまた、とぼける）

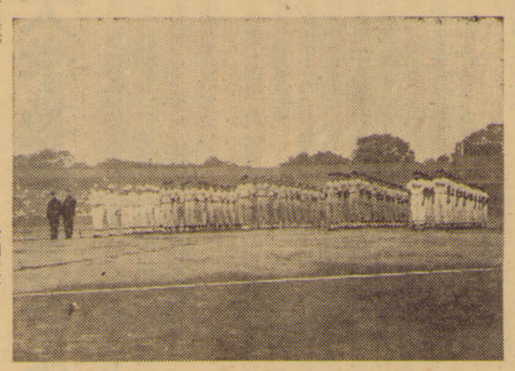
―新人の石川は―。

辻―カーブのコントロールが大分良くなった。シュートも良い。

―第三回には法政と当るわけですが、一番厚い警戒する相手というと。

辻―皆な同じだよ、（と、ここではなかなか慎重）話を聞いていても自信に溢れており、優勝奪回の望み十分である。

その他に目立つことは、今年入った新人で、今シーズンから晴れのユニフォームを着ることになった選手が五人もいるということである。先の投手の石川を筆頭に岡村捕手、藤田一塁手、青野二塁手金川、佐藤外野手である。神宮の特異な雰囲気に呑まれることなく大いに活躍してくれんことを期待する。



東京六大学野球秋季リーグ戦入場式

軟式野球

東京六大学準硬式秋季リーグ戦は九月五日、東伏見グランドで開幕された。三連覇を目指す本学は初戦の東大を7対0・12対1と難なく連破し、幸先のよいスタートを切った。

硬式野球のあまりにも華々しい本校にあっては、とかく目立たない存在であるが、その戦歴には派なものがある。

昭和十五年軟式野球部が創立されて以来、東京六大学リーグ戦において、優勝五回、全日本大会において二回の優勝という好成績を収めている。

ところで今シーズンは主将の上野投手が腰部を負傷し、出場出来ず若干投手面において力が弱まるのは気がかりではあるが、シャットアウト試合七回という記録を持つ湯井を始め西山・さらに新人の青野・松井等が好調なので、なんとかやれそうだ。

打撃面でも、ベテランの磯部・由家・野田に続く佐々木・田島・江島等も調子を上げており、三連覇の偉業も大いに期待出来そうだ。

今後の日程は次の通り。

9月26・27　対早大
10月10・11　対明大
24・25　対法大
31・1　対慶大

バスケットボール

第三十四回関東大学バスケット・ボール秋季リーグ戦は十二日から早大記念堂で開幕された。本校は早大と戦い97対71・86対66と連勝した。ところで春の関東選手権を制覇し、優勝候補の筆頭と予想されていた教大が、第一戦にして慶大にストレートで敗れるという番狂わせがあり、第二週における、立―慶戦が、今リーグ戦の最大のヤマとなりそうだ。

昨年優勝した本学は、奈良・金川・川本の主力選手を卒業させ、力がやや落ちている感がするが、身長一メートル九〇センチの山本を有し、得意の速攻を武器としている現在の立―慶間チームのコンディションとチーム力からみるとシュート力、試合運びにおいては互格のるが、防御力においてもいえ、その他のチームにおいてもシードされるようなことは何処のチームでも同じだろう。

就職

求人、好況の反映

出足は昨年を上廻る

昭和三十四年度の就職戦線は、夏季休暇終了とともにその激しさを加えてきている。今年度の求人会社数は昨年のナベ底景気に比べて、その後の景気上昇を反映し、昨年同期よりも百八十件もの増加をみせ、すべり出しは快調そのものである。見通しはまったく昨年と反対に明るく、来春の就職率は最良のものになるだろう。

学生人事調査発表の九月十二日現在の求人件数は四百四十一件に達し昨年の十月中旬に比し得る。内容をみると各会社も昨年に較べて時期的に早く求人申込みをしており金融関係は例年のとおりの求人数を示し、各部門とも景気良好を端的にあらわしている。各社の採用人数の増加の反映から推薦人数もやや多く、日興、山一証券は推薦人数を二倍にふやしている。

各学部別の求人は、学生数の多い経済学部に対するものが圧倒的で社会、文、理の各学部の順であり文学部では依然として求人難が目限られ、社会学部の求人開拓が進んでいることがうかがわれ、理学部は文科系より就職状況は落着いている。女子の求人はやはり放送、出版、報道部門にしぼられるが、特殊技能による女子の職場がふえているため、女子の就職難はいくぶん緩和されてきている模様。

一方、選考試験は昨年と同様に、大学、会社間、文部省の協定により十月一日より一斉にはじまる。

試験日は一流会社では一日より四日の間に集中され、一流会社を数多く受験することは不可能となり会社側でもよい学生の獲得競争を行い、求職側の学生の就職戦線に拍車をかけている。今後の求人は中小企業が重点となるが、一流会社よりコボれたよい学生をねらう中堅会社も就職戦線に入ってくるよう。

求人会社一覧表

（推薦数）

金融　静岡銀行（経10）・日本信託銀行（経10）・東海銀行（経3）・三井銀行（経7～8）・商工組合中央金庫（経4）・駿河銀行（経5）・富士銀行（経5）・伊予銀行（経3）・日本興業銀行（経3）・北海道拓殖銀行（経10）・三菱銀行（経5）・安田信託銀行（経5）・三和銀行（経5）・日本勧業銀行（経2）・広島市信用組合（3）・日本輸出入銀行（経2）・千葉銀行（経3）・羽後銀行（経2）・荘内銀行（社2）・十六銀行（経3）・協和銀行（経3）・紀陽銀行（2）・八千代信用金庫（経5）・千葉相互銀行（経2）・秋田銀行（経3）・神戸銀行（経2）・瀬野川信用金庫（イ）・百五銀行（経5）・三菱信託銀行（経5）・第一信託銀行（経5）・第一銀行（経6）・第四銀行（経3）・東邦銀行（経3）・山陰合同銀行（経2）・広島銀行（経2）・鹿児島銀行（経2）・城南信用金庫（経10）・住友銀行（2）・四国銀行（経1）・三井信託銀行（経3）・足利銀行（経3）・埼玉銀行（6）・百十四銀行（経1）・東京労働金庫（経5）・北越銀行（経2）・弘前相互銀行（経3）・千葉興業銀行（経2）・青森銀行（3）・中央相互銀行（経5）・東京相互銀行（経6）・千葉県信用農協連合会（2）・芝信用金庫（経4）・東京産業信用金庫（経3営3）・東京三協信用金庫（3）・帝都信用金庫（経3）・亀有信用金庫（1）・山梨中央銀行（経3）・東京商工信用組合（経10営5）・岐阜相互銀行（経3）・福岡相互銀行（経3）・信手殖産銀行（経2）・東京都商工信用金庫（3）

保険　太陽生命（経）・富国生命（経10）・朝日生命（経5）・安田生命（経3）・第百生命（経3）・千代田生命（経3）・第一火災海上（経3）・明治生命（経15）・東京生命（経3）・大正海上火災（経5）・興亜火災海上（経10）・日本団体生命（10）・日勧火災海上（経3）・同和火災海上（経2）・日本生命（経10社4）・日躍火災海上（経5）・三井生命（経7）・住友生命（経3）・大和生命（経営）・千代田生命（経5社5）・千代田火災海上（経4）・大同生命（経2）・朝日火災海上（経2）・明治生命（経15）・安田生命（数1）・山一証券（経40）・東京証券取引所（経5）・玉塚証券（経13）・野村証券（経15）・成瀬証券（2）・野口証券（経3）・小柳証券（5）・日栄証券（経5）・日本勧業証券（経5）・丸荘証券（～1～2）・大和証券（3）・日興証券（経社30女5）・大商証券（経10）・白鳥証券（経5）・山崎証券（経10）・丸益証券（経15）・東京昭和証券（経5）・日本証券（経5）・丸三証券（経6）・角丸証券（経5）・光亜証券（5）・大井証券（経5）・大東証券（経3）・岡三証券（経15）・丸万証券（経）・水戸証券（1）

商事　日商（経2）・高島K K（経2）・長谷商事（経5）・岩谷産業（経1）・丸紅飯田（経1）・東棉商事（経2）・福井商事（経2）・山内洋行（経5）・大洋物産（化5）・ブラチナ産業（―）

鉱業・諸工業　日本鋼管（経5）・日立製作所（経2社2）・中山鋼業（経3）・天野特殊機械（社）・錦織販売（文科系5）・ヤンズ通商（文科系）・東横（経10）・大沢商会（経10）・本下商店（経7）・久野産業（経3）・三共生興（経6）・旭産業（経）・服部時計店（経5）・丸佐（経3）・永島服飾（文化系）・三志商会（―）・河越商事（5）・安全産業（経3）・東興産業（経）・樫山K K（経10）・オリエンタル中村商店（経5）・岡田屋（文科系5）・ネコス（経）・日製産業（物2化2）・青森商店（経）・鈴木製三商店（経）・蝶矢シャツ（文科系）・堀田産業（経）・若林洋傘（経5）・信友（経）・高田商店（経10）・大日本化学商事（経化2）・日本ナショナル金銭登録機（1）・泰天物産（経）・山本商店（経3）・日本港ビルディング（2）・瑞穂産業（4）・原内商事（経3）・蝦国チエン（経1）・小野田レミコン（経2）・入丸産業（経5）・鹿村産業（経2物化2）・レナウン商事（経6文社2）・岡本商店（経2）・平原商事（5）・升喜商店（―）・武井商店（経6）・ツクダヤ（―）・三信商店（経）・タイガー計算器販売（経5）・エアン・ブラウン・マクファレン化学（経）・芝本産業（経5）・新昭光商事（経2）・東芝テンナサービス（経3）・茂木商事（―）・馬沢商店（2～3）・東興商事（経2）・尚山堂（1

特集

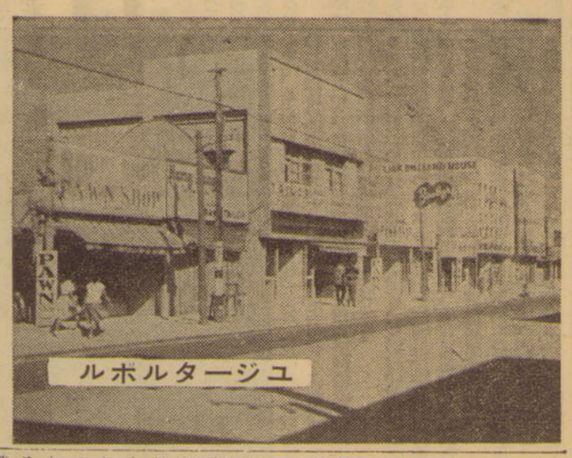
矛盾の島 沖縄

昨三十三年、九月二十日を期し沖縄では、法定通貨が米本国ドルに切替えられた。この日、本土の各紙は、このニュースをわずか十行たらずのコダネで済ました。今の沖縄で、米本土で使用中のワシントンやリンカーンの肖像画のついたドル貨幣が、唯一の通貨であるという政治的にも経済的にも完全に米国支部配下にある事実、加えて、それが我々本土住民にほとんど知られることがない。このことが我々が沖縄問題を取り上げまた、こんど沖縄渡行の目的である。

「沖縄は、いわずと知れた日本領土である。同じ肌の色、同じ言葉を話し、第二次世界大戦で同じように戦つて敗れた八万の同胞が戦後十四年、未だに戦後の苦汁をすつている。」

このように、沖縄問題がなにからなにまで我々日本人が黙殺出来ない大きな問題にもかかわらず、我々はあまりにも、沖縄を知らない。これは勿論、我々にも責任はあるが、マス・コミの責任を見逃すわけにはいかない。那覇高校の甲子園の土ち持帰り事件は知つていても、最も野蛮な、通貨がドルに切替えられた事や、集成刑法が改悪されようとした事はほとんど知られていない。

そこで、我々、立教大学新聞学会では、戦後沖縄の本当の姿を少しも多く知り、マス・メディアの一角としての責任からも、それを学生に知らせる事に努力してきた。ところがこのたび、現地の琉球大学々生会から、学生交歓を兼ねての招へいをいただき、加えて諸先輩の御協力により、渡行が実現された。(カットは基地の町・コザ市)



悲痛な本土への期待

八月十四日

午後五時、われわれの乗船した沖縄丸は那覇市泊港に入港した。昨年の九月、沖縄の通貨が従来のB円からドルに切換えられて以来沖縄問題と取組んできたわれわれは、およそ一年の後にその現状をわれわれ自身の眼を通して確当することができるのである。

さつそく甲板に上つて那覇市街を見る。小高い丘を背に、一見粗末な人家が密集している街は索寞とした印象を与える。

入港する三十分前に始められた税関の検査はまだ続いている。渡航先がまきれもない"日本"でありながら、持物の検査を受けねばならない矛盾―われわれにとつて最初にぶつかつた矛盾である。制服を着た係員が船室にくる。われわれは一人一人パスポートを提示して持物をみせる。

検査は決して厳重とはいえないが持物を全部みせ、持物の表に白墨でOKの印をつけられるのはあまり気持の良いものではない。

税関の検査の途中「沖縄タイムス」と「琉球放送」の記者がやつてきてインタビューをうけた。実のところ、われわれとしても、これほどの関心を抱かれているとは思つていなかつたので少なからず驚いた。

ニュースが限られているせまい沖縄でのジャーナリズムの一取材活動として片づけることもできようが、現地にやつてくるのは大部分アメリカのPRばかりをする人たちで、ほんとうに沖縄を考えてくれる人たちは、パスポートが不許可で全然来れないというのが現状である。

したがつてこのことは、われわれの滞在中にあらゆる南巡の人たちが示してくれた態度を考えると、今度やつて来たのは、どんな人たちなのか、たんなる同情や、うわつらだけでなし、ほんとうに沖縄を深く考えている人たちなのだろうか、といつた現地の人たちの抱く本土人への期待と不安のまじつた関心のあらわれと考えられる。それほどに本土への期待は大きく悲痛という言葉をもつてしても過言ではないのである。

もつとも、本土への悲しい期待というのは、たんに戦後だけの現象というのではなく、大正九年、中国、島津藩、日本に従属した長い植民地の位置から脱して普通の県市町村制が施かれたときから続いているものである。

戦前、本土において"朝鮮人、沖縄人下宿お断り"といつた圧迫に耐え、第二次大戦中は、ひめゆり部隊に象徴されるよな日本への協力によつて、自分たちは日本人、なんたるという自覚と誇りを持とうとした沖縄の人たちの願いは戦後十四年の今日も、いまだ実現されない悲願として続いているのである。

港には琉球大学々生部の石橋さん琉大学生会から渡辺部長の上原君の他二名と沖縄教職員会の福地さんが迎えに来てくれていた。

本土にもスパイ罪を立法化?

八月十五日

午前中、挨拶まわりをする。立法院議長安里積千代氏から始め沖縄タイムス、琉球政府、米民政府、文教局、琉球新報、沖縄県青年団協議会、原水協沖縄県協議会などをまわつたのだが、どこでも歓迎された。とりわけ米民政府が親切に迎えてくれたことはわれわれの渡航目的を思うと、まつた皮肉なことである。

立法院に立寄つた際、問題の布令二三号、改定集成刑法に関する行政法務委員会が開かれていた。その日の委員会では、本土の法務省からやつて来た高橋参事官が、改定集成刑法にたいする見解を発表していたので、われわれも、しばらく傍聴したが、このときの高橋参事官の発言が、後に大きな反響を呼んだので、ここで触れておこう。

現地では高橋参事官の訪問を、改定集成刑法にたいする日本政府の意向を知ることができるとして大きな期待を寄せていた。

しかし、われわれが、前号の新聞で解説したあの弾圧死刑法を、彼は"純粋な法理論の立場から"と前置きして、何ら行過ぎたものではないとしたのである。

彼はさらにそのとき、"本土においても何らかの形でスパイを取締る法律をつくろうとしている。アメリカの施政下にある沖縄においては、このぐらいの法律は当然である"といつた慄るべき内容の発言を、うつかりと、してしまつたのである。

彼としてもいささかあわてて、速記録からそれを削除させたのだが、翌日の新聞に大きく取り扱われてしまつた。

"本土でも、スパイ罪と明記した法律を"という日本政府の一流官言樂は日米安保条約改定が、問題とされている折から、まつたく黙視することはできないであろう。

とにかく彼の今度の言動は、現地人の"あるいは"といつた期待を人の"あるいは"といつた期待を見事に裏切り、アメリカのPRのための訪問として、ちようど同じときに沖縄を訪問した世界人権連盟議長のR・ポールドウイン氏の好評とはまつたく対称的であつた。

それにしても、この一事は、沖縄に対して現在の日本政府が、どのような考えをもつているかを、端的に表明しているのではないだろうか。

午後、西原村の社会大衆党委員長平良幸市氏宅を訪問。

現在、この西原村では、基地の復元補償の問題が起つている。日本軍の使用していた西原飛行場を、戦後米軍がひきつづいて使用していたが、去る四月三十日明け渡された。

最近の後兵器の発達は、必然的に不要な基地を生む。西原飛行場もジエット機の離着陸には狭すぎるという理由で開放されたものである。

開放されたとはいつても、地ならしもコンクリートで固められた土地では田畑に使用することはまつたくできない。

いままで耕作地もなく、この飛行場の地代で生活を維持していた二千六百七十四人もの人たちが、干あがつてしまい、その土地の復元補償あるいは適正な損害賠償を米軍に要求したのである。大部分、現在その飛行場跡は雑草のはえた荒地となり、滑走路以外のつまりコンクリートがひきつめられていないなく狭いところに、甘藷などが新したことなら、そのまま抱越できるから、沖縄について遠慮のない意見をのべてもらいたい"といつていた。

平常、言論の自由を表看板にしているアメリカも、植民地政策を強行するためには言論統制という手段をもちいるというのは、アメリカ資本主義のでたらめさをあらわすものといえよう。

四原則貫徹局ぐるみ闘争のとき琉大学生会は、その旗頭となつて闘つたのであつたが、米軍は学生六名の除籍という報復手段をもち出した。このとき学生会事務局長であつた嶺井さんも、もちろん除籍され、やむなく本土の学校に転校した。今春、卒業して郷里に帰つた彼をまつていたものは、既職のボイコットであつた。

民主々義の象徴・星条旗とは名ばかりその旗の下で苦しめられる住民

空息しそうな島民の生活

植民地統治の生々しい現実

沖縄での大学卒業生は、大部分が教員になるとのことだが、彼の場合会会然みこみがなく、いまだに浪人生活である。

のちに、くわしくふれたが、この嶺井さんたちの問題が現在の琉大学生会の運動に大きな影響をあたえているのである。

八月十六日

午前中、南部戦跡を廻る。

ますひめゆりの塔。

現在洞窟の中は、青々とした苔、やぶが茂り、十四年前の悲劇を思わせる跡はなく、戦没者の名を記した真白な塔が静かに建つている。

つぎに、無名戦士の霊を祀つた魂魄の塔、沖健児の塔に花を捧げる。この三つの塔のある現在の三和村(みわそん)は、沖縄最大の激戦地といわれているが、いまでは甘藷や砂糖キビなどの耕作地となつている。

ひめゆり・魂魄・健児の塔は、いずれも戦没者の霊を祀つたものでありながら観光資源の乏しい沖縄では、戦後十四年の今日、はやくも沖縄有数の観光地となつている。

基地のなかの沖縄

午後、予定通り中部の嘉手納村(かでなそん)で中頭群青年団協議会の人たちと落合う。沖縄の米軍基地の大部分は北部にあり、ここでは沖縄の中に基地があるのか、基地の中に沖縄があるのかといわれているくらいである。

ますます基地をふやすといわれ、中頭群青協で用意してくれた自動車で基地周辺をみてまわつたのだが、完全に舗装された道路をかなりのスピードでとばして、およそ一時間半かかつた大きさにまで驚く。

金網に遮断された基地の中には、兵舎、各種各納庫、ヘリポート、飛行場、診療、家族宿舎などがあり、東洋一といわれるゴルフ場までである。

もちろん、この中には核兵器も持込まれているという。芝生が緑に輝くゴルフ場、百日草で軍が横づけになり、広い芝生の庭をもつ米軍家庭の宿舎。

それらとはまつたくの対称をなしているのが、北谷村(ちやたんそん)の射刈(じやがる)部落であろう。丘陵地帯の谷間のようなところに戦前は七、八十戸だつたのが今では一万百以上の人家が、ほんとうに文字どうり軒をつらねて密集している。

しかも、米軍が基地として使用している膨大な土地はというと、戦後沖縄では最も肥沃な田畑といわれたところであり、接収に反対する人たちを、武装した兵力をもつて威嚇し、強制接収した土地なのである。北谷村の場合、耕作地の九十五%を接収されているのである。

基地を一通りみたあと、胡差市へ行く。

人口四万余の胡差市は、旧越来村に米軍が基地を設置して、急激に繁栄した、典型的な基地の街である。

街は、バー、キャバレー、バウンショップ(本土の質屋と質流品を売る店を兼ねた店)が大部分である。

とくに、センターと呼ばれている米人専門の店が並ぶところでは日本人の看板はまつたく見当らずケバケバしい粗末な通りは、ちようど映画の西部劇に出てくる町のようで、アメリカ人の教養の程度を知らされた。

この胡差市には、われわれが"黒白をつける交差点"と名づけたところがある。

夜になると二つの交差点を通に、一方が白人の街、他方が黒人の街とあつてしまい。どちらかの人間が間違つて反対の街に一歩足を踏入れようものなら、たちまちリンチをくうそうだ。

アメリカの人種問題も、思わぬところで醜態をさらけ出しているのだが、それほどこの街はアメリカナイズされているといえよう。

夕方、宜野湾村(ぎのわんそん)に行き、村役場の室で中頭群青協幹部の人たち五・六人と話した。

彼らの話してくれたことを二、三書こう。

最近、米軍は懐柔政策をとつているといわれるが、土地の接収にもその個所がみられる。

基地の周辺に住む人たちは、米人に部屋や家を貸して生活を営んでいることが多い。だから、土地の所有者は、じやんじやん家を建て貸している。

こうして売買を経た土地の所有者は、永久に米人のものとなつてしまい、後々どのように使用されようとも、一言の文句もいえないことになるのである。

また、那覇市の「自由貿易地域」指定については、沖縄の安価な労働力というものを見逃してはならないという。

つまり、資本家が「自由貿易地域」(自由に入つて来て、生産加工を行うのには、安い労働力というのが必要条件、「自由貿易地域」の指定は、沖縄にとつて決してよいものとはいえない。

つまり、資本家にとつて魅力なものとなつて、資本家にとつて魅力なものとなつて、資本家にとつて魅力なものとなつて

(三面より続く)
ジエツト機墜落事件は不可抗力か

また、あの事件以来、先生たちの中にも、不眠症になつたとか、落ちつかなくなつたという人もあるし、事件の後一ケ月も経つているのに飛行機の爆音をきくと、授業中でも、慌て外へとび出す子供がいるという。

仲宗根校長は幾度に"こんどの事件は、実際に飛行機が落ちて、被害が出たら騒がれたのだが、基地の中の沖縄では、いつまたこのような事件が起るかといつた危険が常にあるし、それでなくとも、爆音がうるさくて授業ができない学校もあり、教育の問題としてでなく、政治の問題としてなんとかしてもらいたい"といつていた。

このように、補償金が完全に支払われようと、陳情が立派に通てられようと、またまた解決されない重要な問題があるようだ。

この宮森小事件は、はたして不可抗力であつたかという疑問が現地の人たちの間でも非常に多い。

たしかに、石川市のあるところは沖縄本島で一番狭いところで、ジエツト機で四、五秒もすれば反対側の海へ行くことができるし、墜落現場から六、七キロも離れた地点に操縦士が無事降りていた事実から、決して避けられない事件ではなかつたと結論づけることもできようが、なにかも問題となるのは、アメリカ人が沖縄の人たちの生命を、あまりにも軽視していることである。

のちに、ある立法院議員が述べる事実を話してくれた。

石川市周辺の基地で働く労務者の話によると、米軍基地内では、宮森小学校にジエツト機が墜落する前にそれを知つて、消火設備など万全の警戒態勢を整えていたという。ところが、自分のところはそれだけ用心する時間ゆとりがあつたにもかかわらず、石川市周辺の各市町村役場や警察には、何んの連絡もしなかつたというのである。

もし、市当局がそれを知つていたなら、あれほどの惨事をひき起すことはなかつたのではなかろうか。人間平等を唱える アメリカのとつた行動にしては、解釈に苦しい事実といえよう。

占領政策に苦しむ北部農村地帯

八月十八日

今日から二日の予定で北部を廻る。

沖縄は、汽車・電車がないためバスの交通機関が非常に発達している。道路も本土のよりはるかに上等なのがを。

とくに、那覇から名護町「なごまち」へ通じている一号路線は、米軍が、われわれがつくつた道路と大いに宣伝している道路だが、完全に舗装されて、素晴しいものだ。名護、辺土名（へんとな）でバスを乗り継いで国頭村（くにがみそん）辺土（へど）部落に着いたが辺土では部落の区長さんにいろいろと北部のことを聞く。

一部に北部は、戦争の被害を一番受けなかつたところといわれている。戦後、米軍基地の場も少い地方である。

ところが、北部も一部の観測以上に、苦しいという。

戦後、消費の旺盛期経済の発達につれて、農村の若い人たちは、細々といつまでも農業にならない農業を捨つて都市へ住みつくようになつてしまい、村に残るのは年寄りばかりで、ひとりとろだと、五百人ぐらいの一部落に二十代の若者が五・六人というところがあるそうだ。

戦後、パイン栽培が盛んになり、儲るというので、ほとんどの農家がつくりはじめたが、製糖工場設備が貧弱なため、今年は処理に困つてトラック七十台分の生パインを捨てたという。

また、鰯詰になつたところで、日本が沖縄内国扱いにしていないところから、むしろ台湾産を優遇すらしているという。たとえば、品質は沖縄産の方がよいにもかかわらず、東京のデパートあたりでは、沖縄産の鰯詰を、売れるからとの理由で故意に台湾産のレツテルをはつて売つているそうだ。

農村の養豚問題も重要だ。

沖縄の食物は、大変油つこいものが多い。たとえば味噌汁といわれるものにも豚肉が入つている。だから農村の養豚は戦後もますます盛んになり、農家の経済がわずかながら潤つてきたとたんに、アメリカが、沖縄での消費量の約九十パーセントのラードを輸入したのである。

豚価はみるみるうちに下落してしまつた。

こんなところにも、基地を確保するための米軍の策謀がはたらいているといえよう。

さらに区長さんは、米軍のでたらめな施政を憤気を強めて語つてくれた。

米軍は、沖縄に膨大な援助をしているというが、実際は自国の宣伝になるような表面的なものだけで沖縄にとつてはむしろ迷惑だという。

つまり、米軍側が何かに援助金を出す場合、必ずその何割かの出資を沖縄側に強制し、出来上つたものはみなアメリカの宣伝用だという。

たとえば、一号路線にしても現在の沖縄にとつて決して必要なものではなく、それだけの費金があれば離島や離島の診療所がすべて完備されるという。また一万、世界屈指の社会福祉国家といわれるアメリカが、沖縄においては、社会福祉法の制定を許さなかつたという事実もある。区長さんは日の丸のことについても語つた。

現在沖縄では、公的な場、たとえば学校等に日の丸を掲揚することは米軍によつて禁止されているが、教職員を中心に、村に残るのは年寄りばかりで、ひとりとろだと、五百人ぐらいの一部落に二十代の若者が五・六人というところがあるそうだ。

戦後、パイン栽培が盛んになり、儲るというので、ほとんどの農家がつくりはじめたが、製糖工場設備が貧弱なため、今年は処理に困つてトラック七十台分の生パインを捨てたという。

また、鰯詰になつたところで、日本が沖縄内国扱いにしていないところから、むしろ台湾産を優遇すらしているという。たとえば、品質は沖縄産の方がよいにもかかわらず、東京のデパートあたりでは、沖縄産の鰯詰を、売れるからとの理由で故意に台湾産のレツテルをはつて売つているそうだ。

農村の養豚問題も重要だ。

沖縄の食物は、大変油つこいものが多い。たとえば味噌汁といわれるものにも豚肉が入つている。だから農村の養豚は戦後もますます盛んになり、農家の経済がわずかながら潤つてきたとたんに、アメリカが、沖縄での消費量の約九十パーセントのラードを輸入したのである。

豚価はみるみるうちに下落してしまつた。

こんなところにも、基地を確保するための米軍の策謀がはたらいているといえよう。

さらに区長さんは、米軍のでたらめな施政を憤気を強めて語つてくれた。

米軍は、沖縄に膨大な援助をしているというが、実際は自国の宣伝になるような表面的なものだけで沖縄にとつてはむしろ迷惑だという。

つまり、米軍側が何かに援助金を出す場合、必ずその何割かの出資を沖縄側に強制し、出来上つたものはみなアメリカの宣伝用だという。

たとえば、一号路線にしても現在の沖縄にとつて決して必要なものではなく、それだけの費金があれば離島や離島の診療所がすべて完備されるという。また一万、世界屈指の社会福祉国家といわれるアメリカが、沖縄においては、社会福祉法の制定を許さなかつたという事実もある。区長さんは日の丸のことについても語つた。

現在沖縄では、公的な場、たとえば学校等に日の丸を掲揚することは米軍によつて禁止されているが、教職員を中心に、村に残るのは年寄りばかりで、ひとりとろだと、五百人ぐらいの一部落に二十代の若者が五・六人というところがあるそうだ。

戦後、パイン栽培が盛んになり、儲るというので、ほとんどの農家がつくりはじめたが、製糖工場設備が貧弱なため、今年は処理に困つてトラック七十台分の生パインを捨てたという。

また、鰯詰になつたところで、日本が沖縄内国扱いにしていないところから、むしろ台湾産を優遇すらしているという。たとえば、品質は沖縄産の方がよいにもかかわらず、東京のデパートあたりでは、沖縄産の鰯詰を、売れるからとの理由で故意に台湾産のレツテルをはつて売つているそうだ。

農村の養豚問題も重要だ。

沖縄の食物は、大変油つこいものが多い。たとえば味噌汁といわれるものにも豚肉が入つている。だから農村の養豚は戦後もますます盛んになり、農家の経済がわずかながら潤つてきたとたんに、アメリカが、沖縄での消費量の約九十パーセントのラードを輸入したのである。

豚価はみるみるうちに下落してしまつた。

こんなところにも、基地を確保するための米軍の策謀がはたらいているといえよう。

さらに区長さんは、米軍のでたらめな施政を憤気を強めて語つてくれた。

米軍は、沖縄に膨大な援助をしているというが、実際は自国の宣伝になるような表面的なものだけで沖縄にとつてはむしろ迷惑だという。

つまり、米軍側が何かに援助金を出す場合、必ずその何割かの出資を沖縄側に強制し、出来上つたものはみなアメリカの宣伝用だという。

たとえば、一号路線にしても現在の沖縄にとつて決して必要なものではなく、それだけの費金があれば離島や離島の診療所がすべて完備されるという。また一万、世界屈指の社会福祉国家といわれるアメリカが、沖縄においては、社会福祉法の制定を許さなかつたという事実もある。区長さんは日の丸のことについても語つた。

現在沖縄では、公的な場、たとえば学校等に日の丸を掲揚することは米軍によつて禁止されている。

ジエツト機の墜ちた宮森小学校附近。この方角から校舎まで被害

複雑な「教育指導委員」の派遣

八月二十一日

午後、沖縄職員会青年部の先生たちと懇談する。

まず、会員六千名を擁するこの教職員会について説明しよう。

過去の基地闘争、復帰運動、最近の改定集成刑法撤廃運動にしても、民連・沖青協・教職員会などと共に、官公労をはじめとする多くの労組がその中核となつているのである。

たとえば、今度の改定集成刑法撤廃運動にしても、民連・沖青協・教職員会などと共に、官公労をはじめとする多くの労組がその中核となつているのである。

たとえば、今度の改定集成刑法撤廃運動にしても、民連・沖青協・教職員会などと共に、官公労をはじめとする多くの労組がその中核となつているのである。

まず、会員六千名を擁するこの教職員会について説明しよう。

過去の基地闘争、復帰運動、最近の改定集成刑法撤廃運動などにおいて、つねにその イニシアティブをとつてきた歴史、目覚ましい活躍ぶりは、教職員を中心に、沖縄住民の間に、広く知られている。

ところが、北部も一部の観測以上に、苦しいという。

戦後、消費の旺盛期経済の発達につれて、農村の若い人たちは、細々といつまでも農業にならない農業を捨つて都市へ住みつくようになつてしまい、村に残るのは年寄りばかりで、ひとりとろだと、五百人ぐらいの一部落に二十代の若者が五・六人というところがあるそうだ。

戦後、パイン栽培が盛んになり、儲るというので、ほとんどの農家がつくりはじめたが、製糖工場設備が貧弱なため、今年は処理に困つてトラック七十台分の生パインを捨てたという。

また、鰯詰になつたところで、日本が沖縄内国扱いにしていないところから、むしろ台湾産を優遇すらしているという。たとえば、品質は沖縄産の方がよいにもかかわらず、東京のデパートあたりでは、沖縄産の鰯詰を、売れるからとの理由で故意に台湾産のレツテルをはつて売つているそうだ。

農村の養豚問題も重要だ。

沖縄の食物は、大変油つこいものが多い。たとえば味噌汁といわれるものにも豚肉が入つている。だから農村の養豚は戦後もますます盛んになり、農家の経済がわずかながら潤つてきたとたんに、アメリカが、沖縄での消費量の約九十パーセントのラードを輸入したのである。

豚価はみるみるうちに下落してしまつた。

こんなところにも、基地を確保するための米軍の策謀がはたらいているといえよう。

さらに区長さんは、米軍のでたらめな施政を憤気を強めて語つてくれた。

米軍は、沖縄に膨大な援助をしているというが、実際は自国の宣伝になるような表面的なものだけで沖縄にとつてはむしろ迷惑だという。

つまり、米軍側が何かに援助金を出す場合、必ずその何割かの出資を沖縄側に強制し、出来上つたものはみなアメリカの宣伝用だという。

たとえば、一号路線にしても現在の沖縄にとつて決して必要なものではなく、それだけの費金があれば離島や離島の診療所がすべて完備されるという。また一万、世界屈指の社会福祉国家といわれるアメリカが、沖縄においては、社会福祉法の制定を許さなかつたという事実もある。区長さんは日の丸のことについても語つた。

現在沖縄では、公的な場、たとえば学校等に日の丸を掲揚することは米軍によつて禁止されている。

圧迫に消極的な琉大学生会

八月二十三日

夜、琉大の学生と懇談会をもつ。学生会、新聞部、学寮の自治会などから十名ぐらいの学生が集つたのだが、われわれが接した範囲内の学生たちは、一般に真面目で純朴な感じをうけた。

このように米軍が、おのれの統治下にある国の経済に直接投資して実権を握つているのは、過去のアメリカ植民地政策には決してなかつたことであるという。

また、米軍は、沖縄には莫大な援助をしているとつねに宣伝しているが、大会社の投資によつて援助金は比べものにならぬほどの利益をあげているという。

ちなみに、琉球銀行が今年の三月までにあげた純益は、四百二十三万九千ドル（十五億二千六百四万円）という高きにはつている。

最近沖縄では、基地依存経済ということを警戒して、祖国復帰へと基地撤廃を切り離して考える祖国復帰の運動に、完全に米軍の手中にあるために、日本全体の問題として基地撤廃を考えようという意見がかなり多くなつているだが、これにたいする瀬長氏の意見と、沖縄の祖国復帰、基地撤廃運動の今後の展望を語つてもらう。

まず、先にのべた意見は、その支持者たちがいつているように現実的であるとは決していえないという。なぜなら、アメリカが沖縄の行政権を握つて離さないのは、自身の安全のための基地を永久に保有したいためであつて、他のなにものでもない。したがつて、アメリカが沖縄の祖国復帰を認めるときは、沖縄の基地を放棄するときであるという。

沖縄の現実を冷静に判断するなら祖国復帰運動をすすめるとき、たとえ基地撤廃を切り離そうとしても、影のようにくつついてくるものであるという。

たしかに基地に依存して生活する人たちにとつては、基地撤廃は死活問題であろう。沖縄の経済を発展させるのは米軍基地の存在ではなくて、本土に復帰してはじめて、可能なことであるという。

だから、そういつた基地撤廃に不安を抱く人たちには、確実な数字や例をもつて、粘り強く説得するのが大切であるという。

そして、そのような説得を重ぬていく程で、個々の力を組織していくことが、祖国復帰、基地撤廃運動を成功に導くものであり、現在沖縄の労働者たちの組合はどうなつているのだろうか。

およそ本土と同じ内容をもつた労働三法が、二十八年十月に施行されて以来、沖縄の労働者たちは熱心に組合結成の努力を続け、現在は官公労をはじめ六十の労働組合となつている。

さて、このような低賃金にあえぐ沖縄の労働者たちの組合はどうなつているのだろうか。

およそ本土と同じ内容をもつた労働三法が、二十八年十月に施行されて以来、沖縄の労働者たちは熱心に組合結成の努力を続け、現在は官公労をはじめ六十の労働組合となつている。

しかし、その労組も米軍の認可制となり、不認可組合はスト権や団体交渉権をもつことはできない。米軍が嫌う人物が役員となつた労組は決して認可されることがないそれでも現地の労働者たちは、強い団結力をもつて、つぎつぎに争議を起し、闘つている。昨三十三年までの争議件数は二十九件であつたが、これらの争議は、本土のように支援団体の多い争議とちがつて、米軍の区政下で派立無援の闘いであり、極度の困しさであつたという。

さらに特筆すべきことは、このような労働組合の抬頭は、祖国復帰、基地撤廃などの運動に非常に大きい影響を与えている事実である。

住民の間から各々に盛り上りをまいた従来の運動に終止符を打ち、経済闘争から政治闘争へと自覚した多くの労組が中核となつて運動を進める傾向が非常に強くなつているのである。

たとえば、今度の改定集成刑法撤廃運動にしても、民連・沖青協・教職員会などと共に、官公労をはじめとする多くの労組がその中核となつているのである。

住民の間から各々に盛り上りをまいた従来の運動に終止符を打ち、経済闘争から政治闘争へと自覚した多くの労組が中核となつて運動を進める傾向が非常に強くなつているのである。

たとえば、今度の改定集成刑法撤廃運動にしても、民連・沖青協・教職員会などと共に、官公労をはじめとする多くの労組がその中核となつているのである。

住民の間から各々に盛り上りをまいた従来の運動に終止符を打ち、経済闘争から政治闘争へと自覚した多くの労組が中核となつて運動を進める傾向が非常に強くなつているのである。

射撃演習地の農民達

八月十九日

辺土名から今帰仁（なきじん）を通つて本部（もとぶ）へ向う。伊江島について、伊江村（いえそん）の青年から聞いた話を紹介しよう。

伊江島は、本部から船でおよそ三十分のところにある小さい島であるが、現在、米空軍の射撃演習地として、耕作地の六割を接収されているところである。

戦前より沖縄有数の裕福な農業村であつた伊江村の農民たちは、土地接収に強い抵抗を示し、今もなおそれを続けている。

辺土名に帰り一泊する。

射撃演習地の農民達

八月十九日

辺土名から今帰仁（なきじん）を通つて本部（もとぶ）へ向う。伊江島について、伊江村（いえそん）の青年から聞いた話を紹介しよう。

伊江島は、本部から船でおよそ三十分のところにある小さい島であるが、現在、米空軍の射撃演習地として、耕作地の六割を接収されているところである。

戦前より沖縄有数の裕福な農業村であつた伊江村の農民たちは、土地接収に強い抵抗を示し、今もなおそれを続けている。

孤立無援の労組運動

八月二十日

夜、前述の瀬井さんと彼の友人五・六名と労働問題など話す。

現在沖縄の労働者数は、およそ十三万人、このうち軍雇用者が五万人といわれている。

ところが、沖縄の労働賃金は極端に低く、本土と比較して、公務員、教職員などが、およそ六十%であり、最近賃金法の制定されている現状では、時給二十円という常識では考えられない低賃金のところもある。

さらに、賃金の入種的差別がはなはだしく、軍労務者に例をとれば沖縄人の賃金はアメリカ人の十分の一、フイリツピン人の五分の一となつている。

さて、このような低賃金にあえぐ沖縄の労働者たちの組合はどうなつているのだろうか。

およそ本土と同じ内容をもつた労働三法が、二十八年十月に施行されて以来、沖縄の労働者たちは熱心に組合結成の努力を続け、現在は官公労をはじめ六十の労働組合となつている。

しかし、その労組も米軍の認可制となり、不認可組合はスト権や団体交渉権をもつことはできない。米軍が嫌う人物が役員となつた労組は決して認可されることがないそれでも現地の労働者たちは、強い団結力をもつて、つぎつぎに争議を起し、闘つている。昨三十三年までの争議件数は二十九件であつたが、これらの争議は、本土のように支援団体の多い争議とちがつて、米軍の区政下で派立無援の闘いであり、極度の困しさであつたという。

さらに特筆すべきことは、このような労働組合の抬頭は、祖国復帰、基地撤廃などの運動に非常に大きい影響を与えている事実である。

住民の間から各々に盛り上りをまいた従来の運動に終止符を打ち、経済闘争から政治闘争へと自覚した多くの労組が中核となつて運動を進める傾向が非常に強くなつているのである。

たとえば、今度の改定集成刑法撤廃運動にしても、民連・沖青協・教職員会などと共に、官公労をはじめとする多くの労組がその中核となつているのである。

住民の間から各々に盛り上りをまいた従来の運動に終止符を打ち、経済闘争から政治闘争へと自覚した多くの労組が中核となつて運動を進める傾向が非常に強くなつているのである。

渡航自由の獲得が第一
情報センター 本土との結びつきを

以上のように、我々がこの目で沖縄の現状を見聞したものを報告して来たのであるが、あの小さな島に、どれほどと多くの矛盾があるのかがわかつたことと思う。如何に小さな島とはいえ、九十万の人口を擁し、それぞれ異る気候、地勢を持つ各地方に、またそこに生活する各階層の人々の間に多くの問題が生れて来ている。しかし、これらいろいろな形で出てきている問題には、その底に、全てを関連するひとつの大きな矛盾があるのである。政治的、経済的な矛盾はすべて、いま沖縄が米国に占領され、米国のための軍事基地として接収されているからである。では、その矛盾がいまの沖縄で どんな形で現われているかについてふれてみよう。

まず、沖縄の住民は一体どのような位置にあるのだろうか。

本土では、沖縄出身者はもちろんのこと、現沖縄住民でもこちらへ来れば、完全に日本人として待遇されている。

選挙権も持ち、国会議員にも立候補出来る。本人と同等の権利、義務を持つている。だが、いま沖縄という島の中に住いを定めたとするとそこには、徹底的な差別が附随してくる。祖国をすら外国扱いされその選挙には旅券が必要である。

しかも、米軍から、"要注意人物"としてにらまれると、旅券すら下りないのである。

また、特に注意せねばならないのは次の点である。

一体、日本人を外国人として扱われ、本土と切り離なされた沖縄住民は、米国に完全統治されている状態のもとで、米国民として待遇されているのだろうか。米国は、沖縄住民を外国人としてあつかいも、米国は平和条約第三条によつて、沖縄に対して「行政、立法、司法上の権力の全部かつ一切を行使する権利」を持つている。にもかかわらず、住民は、すべての面で米国民との差別を押し付けられ充分な保障のない生活を強制されているのである。

"我々は、日本人でもなく、アメリカ人でもない。"という沖縄住民の嘆きである。この嘆きは一体どういう事実からきているのか、その政治形体について報告してみる。一九五三年以来、沖縄には「琉球政府」という、立法、行政司法機関を備えた政府が出来ている。しかし、その実権はまつたく米軍の手に握られている。というのは琉球政府は沖縄での政治の全権を行うことができるとしてあるが、そこには琉球政府米国政府の布令、指令に従うという規定がなされているからである。

さらに、政府の行政権は首席（総理大臣に似た地位）に属しているがその首席も高等弁務官（米軍）の任命できまる。その高等弁務官の権力が強いのも驚くべきことである。彼は、必要な場合、政府、行政団体などで制定された法、布令、規則の施行を禁止することもできる。逆に、適当と認める命令、規則の施行を命ずることが出来る。

このような状態が何を意味するかなるほど、沖縄には、沖縄住民政府があり、議会があり、裁判所がある。沖縄人相互の間には基本的な不平等はないが、沖縄住民を支配しているのは住民自身ではない。いつさいの権力はつきつめると高等弁務官に帰属しているのである。

司法においても、琉球民裁判所と米国民政府裁判所があり、米軍に巧みに利用されている。前者はむろん沖縄住民に対する裁判であるが後者は軍人及びその家族を含めて国際連合国民に対するものである。その裁判内容は公表されず、米国に不利なものは、全て民政府裁判へすり代えてしまう国同にある。ここでの沖縄住民の犠牲は非常なものとなつている。

このように、米国は沖縄における絶対の全権力を持つている。沖縄の土地の収用にしても沖縄住民のためにおこなうときは、土地収用法が適用され、住民の委員からなる審査会にかかるが、米軍のための土地収用は布令によつておこなわれ、沖縄住民は委員としてもこれに参加できない。

住民間には民主主義があると仮定しても、住民と米軍との縦の関係は明らかに専制々度である。

この制度が、沖縄の矛盾を生みだしている最大なものである。全て が住民の望む方向と逆に進んでいる。

例をみない米軍の投資

いま沖縄では莫大な土地が接収されている。詳しくいえば、全沖縄面積の二二%強が接収されている現状である。本土の接収の割合は三%強である。しかも、本土の接収地のうち、山林、原野が九〇%近いのに反して、沖縄では山林、原野が三五%、農地宅地の合算が実に四八%を占めているのである。

沖縄の軍用地問題が農民にとつてどんなに重要であり、死活の問題であるかは、この事情からもあきらかであろう。農村が中心であつた沖縄がこのように多くの土地を接収されてはほとんどに生きる道があるだろう。農村の若い層は続々都市へ流れ込み、米軍基地で生活を支えている現状である。

米軍基地のために苦しめられているのは、ただ接収されている地域だけではないのである。このような農村に於ては、間接的にとはいえ、その影響は非常に大きなものである。何故沖縄ではそうなのかそれは次の点に起因している。

米軍は、過去に於いろいろな国を占領し、現在でも数々の基地を持つている。沖縄がこれらの植民地と異る大きな点は、ここで米軍は基地を確保すると同時に、資本の投資を行い経済面でも確実に押さえ付けていることである。沖縄の特殊事情はここにも現われている政治の面、経済の面で完全にその実権を握つている米国は非常な巧みさで沖縄の現状を被いかくし、宣伝につとめている。宣伝用の道具に輝かしい歴史をもつた琉大学生会の、現在の活動状況は決して活発であるとはいえないようだ。学生会の幹部の人たちの話では、三十一年の烏くるみ闘争のとき、六名の学生が除籍になつた事実が現在の不活発さの一因であるという。

経済的にもかなり恵まれている琉大生たちの間には、よけいなことはなるべく避けて、適当に勉強をし卒業して、なるべく良い就職先をみつけようといつた小市民的個向が強く、さらに進んで真の幸福を求める者は、非常に少いという。

このようなかでの組織化と運営は極度に困難であると学生会役員たちはいう。

しかし、学生がいかに無関心とはいえ、数多、沖縄の矛盾の本質をみきわめる態度を失つてはならないだろう。

彼らのすぐ近くにも、新聞の検閲制度や、外部団体へ加入の不許可などの問題が山積しているではなかろうか。

「共に起ちあがろう」瀬長氏の訴え

八月二十四日

沖縄の種々の反体制運動のなかで、教組的な存在を示す瀬長亀次郎氏に会う。

小さな雑貨店を営む氏の家は、沖縄刑務所のすぐ裏にあるのは大変面白いことである。というのはかつて、氏も米軍からの不当な圧力によつて、二年間この刑務所に厄介になつたことがあるから。

刑務所の壁がみえる部屋で、およそ二時間、沖縄の直面する問題について静かな口調で話してくれた。まず、アメリカの植民地政策について語る。

基地保有のためには、あらゆる手段をこうじるアメリカは、もちろん経済の実権も掌握している。

つまり、琉球銀行（日本銀行と同じものを基礎とする資本主義国家の銀行）を通じて、沖縄の経済を支配している。

琉球銀行は、沖縄の産業、貿易、金融、土地、住宅、電力、ガス、水道、石油の会社など大手筋の会社の株の過半数は必ず米軍がもつている。

とくに金融面では、琉球銀行の下に組合銀行という制度をとつている。

このように米軍が、おのれの統治下にある国の経済に直接投資して実権を握つているのは、過去のアメリカ植民地政策には決してなかつたことであるという。

また、米軍は、沖縄には莫大な援助をしているとつねに宣伝しているが、大会社の投資によつて援助金は比べものにならぬほどの利益をあげているという。

ちなみに、琉球銀行が今年の三月までにあげた純益は、四百二十三万九千ドル（十五億二千六百四万円）という高きにはつている。

最近沖縄では、基地依存経済ということを警戒して、祖国復帰運動を成功に導くものであり、現在沖縄の労働者たちの組合はどうなつているのだろうか。

およそ本土と同じ内容をもつた労働三法が、二十八年十月に施行されて以来、沖縄の労働者たちは熱心に組合結成の努力を続け、現在は官公労をはじめ六十の労働組合となつている。

しかし、その労組も米軍の認可制となり、不認可組合はスト権や団体交渉権をもつことはできない。米軍が嫌う人物が役員となつた労組は決して認可されることがないそれでも現地の労働者たちは、強い団結力をもつて、つぎつぎに争議を起し、闘つている。昨三十三年までの争議件数は二十九件であつたが、これらの争議は、本土のように支援団体の多い争議とちがつて、米軍の区政下で派立無援の闘いであり、極度の困しさであつたという。

さらに特筆すべきことは、このような労働組合の抬頭は、祖国復帰、基地撤廃などの運動に非常に大きい影響を与えている事実である。

住民の間から各々に盛り上りをまいた従来の運動に終止符を打ち、経済闘争から政治闘争へと自覚した多くの労組が中核となつて運動を進める傾向が非常に強くなつているのである。

たとえば、今度の改定集成刑法撤廃運動にしても、民連・沖青協・教職員会などと共に、官公労をはじめとする多くの労組がその中核となつているのである。

住民の間から各々に盛り上りをまいた従来の運動に終止符を打ち、経済闘争から政治闘争へと自覚した多くの労組が中核となつて運動を進める傾向が非常に強くなつているのである。

全ての権力は米軍の手に

以上のように、我々がこの目で沖縄の現状を見聞したものを報告して来たのであるが、あの小さな島に、どれほどと多くの矛盾があるのかがわかつたことと思う。如何に小さな島とはいえ、九十万の人口を擁し、それぞれ異る気候、地勢を持つ各地方に、またそこに生活する各階層の人々の間に多くの問題が生れて来ている。しかし、これらいろいろな形で出てきている問題には、その底に、全てを関連するひとつの大きな矛盾があるのである。政治的、経済的な矛盾はすべて、いま沖縄が米国に占領され、米国のための軍事基地として接収されているからである。では、その矛盾がいまの沖縄でどんな形で現われているかについてふれてみよう。

まず、沖縄の住民は一体どのような位置にあるのだろうか。

本土では、沖縄出身者はもちろんのこと、現沖縄住民でもこちらへ来れば、完全に日本人として待遇されている。

選挙権も持ち、国会議員にも立候補出来る。本人と同等の権利、義務を持つている。だが、いま沖縄という島の中に住いを定めたとするとそこには、徹底的な差別が附随してくる。祖国をすら外国扱いされその選挙には旅券が必要である。

しかも、米軍から、"要注意人物"としてにらまれると、旅券すら下りないのである。

また、特に注意せねばならないのは次の点である。

一体、日本人を外国人として扱われ、本土と切り離なされた沖縄住民は、米国に完全統治されている状態のもとで、米国民として待遇されているのだろうか。米国は、沖縄住民を外国人としてあつかいも、米国は平和条約第三条によつて、沖縄に対して「行政、立法、司法上の権力の全部かつ一切を行使する権利」を持つている。にもかかわらず、住民は、すべての面で米国民との差別を押し付けられ充分な保障のない生活を強制されているのである。

"我々は、日本人でもなく、アメリカ人でもない。"という沖縄住民の嘆きである。この嘆きは一体どういう事実からきているのか、その政治形体について報告してみる。一九五三年以来、沖縄には「琉球政府」という、立法、行政司法機関を備えた政府が出来ている。しかし、その実権はまつたく米軍の手に握られている。というのは琉球政府は沖縄での政治の全権を行うことができるとしてあるが、そこには琉球政府米国政府の布令、指令に従うという規定がなされているからである。

さらに、政府の行政権は首席（総理大臣に似た地位）に属しているがその首席も高等弁務官（米軍）の任命できまる。その高等弁務官の権力が強いのも驚くべきことである。彼は、必要な場合、政府、行政団体などで制定された法、布令、規則の施行を禁止することもできる。逆に、適当と認める命令、規則の施行を命ずることが出来る。

このような状態が何を意味するかなるほど、沖縄には、沖縄住民政府があり、議会があり、裁判所がある。沖縄人相互の間には基本的な不平等はないが、沖縄住民を支配しているのは住民自身ではない。いつさいの権力はつきつめると高等弁務官に帰属しているのである。

司法においても、琉球民裁判所と米国民政府裁判所があり、米軍に巧みに利用されている。前者はむろん沖縄住民に対する裁判であるが後者は軍人及びその家族を含めて国際連合国民に対するものである。その裁判内容は公表されず、米国に不利なものは、全て民政府裁判へすり代えてしまう国同にある。ここでの沖縄住民の犠牲は非常なものとなつている。

このように、米国は沖縄における絶対の全権力を持つている。沖縄の土地の収用にしても沖縄住民のためにおこなうときは、土地収用法が適用され、住民の委員からなる審査会にかかるが、米軍のための土地収用は布令によつておこなわれ、沖縄住民は委員としてもこれに参加できない。

住民間には民主主義があると仮定しても、住民と米軍との縦の関係は明らかに専制々度である。

この制度が、沖縄の矛盾を生みだしている最大なものである。全て が住民の望む方向と逆に進んでいる。

例をみない米軍の投資

いま沖縄では莫大な土地が接収されている。詳しくいえば、全沖縄面積の二二%強が接収されている現状である。本土の接収の割合は三%強である。しかも、本土の接収地のうち、山林、原野が九〇%近いのに反して、沖縄では山林、原野が三五%、農地宅地の合算が実に四八%を占めているのである。

沖縄の軍用地問題が農民にとつてどんなに重要であり、死活の問題であるかは、この事情からもあきらかであろう。農村が中心であつた沖縄がこのように多くの土地を接収されてはほとんどに生きる道があるだろう。農村の若い層は続々都市へ流れ込み、米軍基地で生活を支えている現状である。

米軍基地のために苦しめられているのは、ただ接収されている地域だけではないのである。このような農村に於ては、間接的にとはいえ、その影響は非常に大きなものである。何故沖縄ではそうなのかそれは次の点に起因している。

米軍は、過去に於いろいろな国を占領し、現在でも数々の基地を持つている。沖縄がこれらの植民地と異る大きな点は、ここで米軍は基地を確保すると同時に、資本の投資を行い経済面でも確実に押さえ付けていることである。沖縄の特殊事情はここにも現われている政治の面、経済の面で完全にその実権を握つている米国は非常な巧みさで沖縄の現状を被いかくし、宣伝につとめている。宣伝用の道具に輝かしい歴史をもつた琉大学生会の、現在の活動状況は決して活発であるとはいえないようだ。学生会の幹部の人たちの話では、三十一年の烏くるみ闘争のとき、六名の学生が除籍になつた事実が現在の不活発さの一因であるという。

経済的にもかなり恵まれている琉大生たちの間には、よけいなことはなるべく避けて、適当に勉強をし卒業して、なるべく良い就職先をみつけようといつた小市民的個向が強く、さらに進んで真の幸福を求める者は、非常に少いという。

このようなかでの組織化と運営は極度に困難であると学生会役員たちはいう。

しかし、学生がいかに無関心とはいえ、数多、沖縄の矛盾の本質をみきわめる態度を失つてはならないだろう。

彼らのすぐ近くにも、新聞の検閲制度や、外部団体へ加入の不許可などの問題が山積しているではなかろうか。

「共に起ちあがろう」瀬長氏の訴え

八月二十四日

沖縄の種々の反体制運動のなかで、教組的な存在を示す瀬長亀次郎氏に会う。

小さな雑貨店を営む氏の家は、沖縄刑務所のすぐ裏にあるのは大変面白いことである。というのはかつて、氏も米軍からの不当な圧力によつて、二年間この刑務所に厄介になつたことがあるから。

刑務所の壁がみえる部屋で、およそ二時間、沖縄の直面する問題について静かな口調で話してくれた。まず、アメリカの植民地政策について語る。

基地保有のためには、あらゆる手段をこうじるアメリカは、もちろん経済の実権も掌握している。

つまり、琉球銀行（日本銀行と同じものを基礎とする資本主義国家の銀行）を通じて、沖縄の経済を支配している。

琉球銀行は、沖縄の産業、貿易、金融、土地、住宅、電力、ガス、水道、石油の会社など大手筋の会社の株の過半数は必ず米軍がもつている。

とくに金融面では、琉球銀行の下に組合銀行という制度をとつている。

このように米軍が、おのれの統治下にある国の経済に直接投資して実権を握つているのは、過去のアメリカ植民地政策には決してなかつたことであるという。

また、米軍は、沖縄には莫大な援助をしているとつねに宣伝しているが、大会社の投資によつて援助金は比べものにならぬほどの利益をあげているという。

ちなみに、琉球銀行が今年の三月までにあげた純益は、四百二十三万九千ドル（十五億二千六百四万円）という高きにはつている。

最近沖縄では、基地依存経済ということを警戒して、祖国復帰運動を成功に導くものであり、現在沖縄の労働者たちの組合はどうなつているのだろうか。

およそ本土と同じ内容をもつた労働三法が、二十八年十月に施行されて以来、沖縄の労働者たちは熱心に組合結成の努力を続け、現在は官公労をはじめ六十の労働組合となつている。

しかし、その労組も米軍の認可制となり、不認可組合はスト権や団体交渉権をもつことはできない。米軍が嫌う人物が役員となつた労組は決して認可されることがないそれでも現地の労働者たちは、強い団結力をもつて、つぎつぎに争議を起し、闘つている。昨三十三年までの争議件数は二十九件であつたが、これらの争議は、本土のように支援団体の多い争議とちがつて、米軍の区政下で派立無援の闘いであり、極度の困しさであつたという。

さらに特筆すべきことは、このような労働組合の抬頭は、祖国復帰、基地撤廃などの運動に非常に大きい影響を与えている事実である。

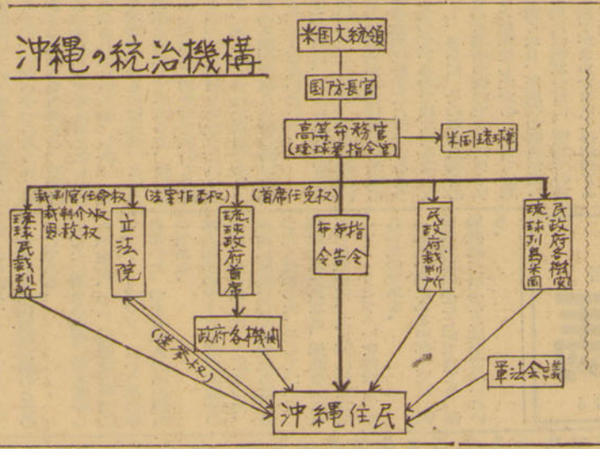
住民の間から各々に盛り上りをまいた従来の運動に終止符を打ち、経済闘争から政治闘争へと自覚した多くの労組が中核となつて運動を進める傾向が非常に強くなつているのである。

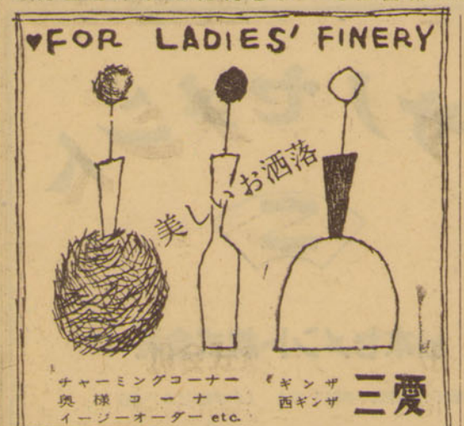
たとえば、今度の改定集成刑法撤廃運動にしても、民連・沖青協・教職員会などと共に、官公労をはじめとする多くの労組がその中核となつているのである。

住民の間から各々に盛り上りをまいた従来の運動に終止符を打ち、経済闘争から政治闘争へと自覚した多くの労組が中核となつて運動を進める傾向が非常に強くなつているのである。

「私たちも頑張りますからあなたたちも力強くたちあがつて下さい」と語る瀬長亀次郎氏

沖縄の統治機構





珈琲と音楽
幻想
池袋東口
TEL(982) 1271

趣味の
洋品

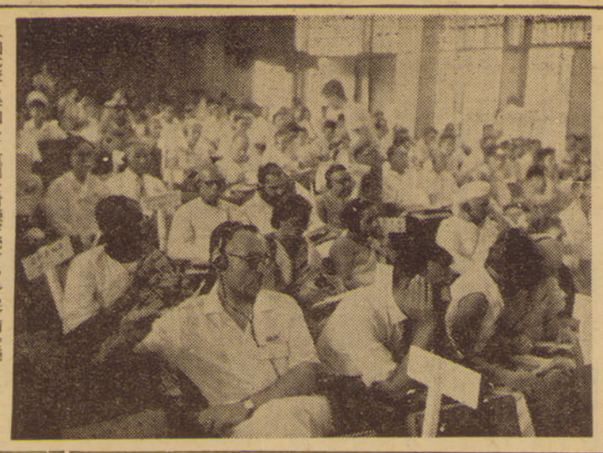
第五回原水爆禁止世界大会に参加して

責任意識と組織的行動理論の確立へ

安保改定反対阻止と大会の形骸化を謀る岸自民党声明

第五回原水爆禁止世界大会は、八月一日から予備会議をもつて広島で開かれた。九十二カ国の外国代表を加えたこの大会は、あらゆる妨害、中傷にもめげず大なる成果をあげた。自民党のいわゆる〝アカ呼ばわり〟によつて補助金を出さない呉町村……等もあるなかで開かれた第五回大会は、それだけに大いに注目されるものがあつた。昨年の第四回大会以来、色々な形で云われていた量から質への転換ということも今年から真剣に討論されるようになり、それなりの結論は出されたけれども、従来のハバヒロイズムの殻を脱し切れない点もあつた。大会に参加したほとんどの人達は、真剣に原水爆の実験、その保有にいたるまで反対するということ。さらに、原子戦争への準備となる安保条約改定には、あくまで反対して闘うという点では一致をみていた。しかしながら、安保条約改定阻止を決議する段階において、原水協では、あくまでもこれを拒んでいた点など不明確な問題も残されている。

一方、全学連の大会における態度、右翼の横行など、はつきり明記する必要のある行動も大いにあつたことは、これからの原水協のあり方と共に注目にあたいするものであつた。



外国代表も参加して真剣な討議が続けられる予備会議

一日から予備会議が開かれ、四日の午後には東京、新潟、与論島を出発したいわゆる平和六行進を迎え、五日からの本会議は、十七の会場に分かれてもたれた。岸自民党は、官からが先頭にたつことによつて、マス・コミを総動員して、原水禁運動に攻撃宣伝を加えて来た。その一つは、「原水禁運動は純粋な人道問題であるから安保のような政治問題をあつかうのは、運動の趣旨に反する偏向である」ということ、その二は「世界大会と銘うつ以上、安保のような国内問題を大会で討議するのは外国代表も参加しているてまえ失礼ではないか。」という点と最後は、安保条約改定妨害そのものを狙とする意見であつた。以上三つの岸自民党、マス・コミの見解に一致してみられる傾向は、安保条約改定の危険性をおおいかくすためにことさらに原水禁運動である点を加つてはならない、純粋な意味での人道問題として運動をすすめなければならないといういつている点である。

もつともらしく人道主義、外国代表うんぬんと言つているけれども真剣な討議を妨害することによつて、安保条約改定反対闘争がたくみ、安保条約改定反対闘争がが大衆運動化するのをおそれる複雑な心理てんぐる事件の犯人はだれだ」と書きたてる新聞もあつた。

ほとんど全警官の言うことだけが一方的に大宣伝されているなかで（被告、弁護人の主張は検察官の主張をひきたてるサシミのツマにされていた）一審の有罪判決がおこなわれ、裁判長はふるえる声で死刑判決を言い渡した。私たちは良心の苦悩、良心を売つたなど感ずにはいられなかつた。政府見であり、思想的色めがねである。だから唯一の理由は、被告諸君が労組員であり、共産主義者であり、赤化伐の必要があつたからと理解する様かないのである。そして松川事件では、二審の誤判の理由は、被告たちする偏見であつたことにしなければ赤がやつたことにしなければならない、そうしないと何と言われるかわからない。被告は赤だ、やつたのだ。そこでやつたことにして、もつともらしくリクツをつけたけが「二審裁判所の仕事だ。裁判官の心を売つたし、裁判の独立公正も独立も崩壊も何もあつたも

の勧告では、「一方ではいかなる国に対しても内政干渉をしてはならないが、いやしくも核武装を進め、原子戦争の危険を増大するような問題は国際的な共同行動によつて阻止されなければならない。」といつている。

戦争が平和ということが、全人類的な課題となつている時、安保条約改定のような核武装と結びついた改悪が一国内だけの問題でないのはしてく当然なことであろう。また、この大会へ参加した人達は、みんな、真剣に安保条約の改定について心配し、これからの運動の進め方についてもかつぱつな意見を述べていた。確かに参加者には、はつきりした意識というものがうかがわれた。その真面目な態度はこの運動が発展していく可能性についての大なるものであることを示していた。一部婦人代表にみられた「安保条約改定の問題はよくわからないので、これから勉強して……」という意見は、安保条約改定に対する積極的な意見としてではなく、むしろ、その問題から逃のとうとしているように思えたけれども、母親大会で「多くの問題を含む安全保障条約の改定については、地道な学習活動と改定阻止のため政府へ力強い要請とがあわせておこなわれることになりました。」という宣言にもみられるように、前記のような意見は全くの少数意見であつて、婦人の運動も着実に一歩一歩前進をえていることは確かである。一方、この大会に出席する全学連の運動という一部の批判にもめげず終始積力的に動いていたけれども、別協議会にみられるような幹部の態度というものは今後の活動の上からいつても深く考を促す必要がある点だろう。

平和運動も政治運動も根底はヒューマニズム

このような悪宣伝のなかで開かれた第五回世界大会はどのような態度をもつて討議をし、また、答えたであろうか。いわゆる〝アカ呼ばわり〟と結びついた政治問題うんぬんということは、各分散会で報告された「情勢と運動について」の要旨でも述べているように〝原水禁運動は、ヒューマニズムを基礎とする運動であるが、ヒューマニズムを圧殺する政治を批判することは正しい。われわれがみんな政治ととりく右翼利と義務をもつているのであつて「人間を滅亡から救う政治をわたくしたちの手でうばたてなければならない」（日本国民への訴え）のである。

われわれは、いつでも国の政治に関心をもち、自分の立場を正確に把握し、真剣に二つ二つの政策に対して考え、その考え方的確にする必要がある。

その意味からも、たまたま、自分の立場がある政策に対して、特定な政党の要求と一致したからといつて、〝アカ呼ばわり〟される筋合はないのであつて、「それがどこから来るものであつても、平和に味方する行動を支持し、平和への脅威にたいしては、これに反対しなければならない。」（第四回大会、世界平和への勧告）し、予備会議で確認され「原水爆禁止運動の原則、目標、共同行動についての勧告」にまとめられた、「原水爆禁止運動は、たとえどんな初歩的な運動でも、本質的に政治とつながつており、われわれが政治的であるという非難を心配するあまり政治的な問題へのかかわりあいを避けようとすれば、それによつてかえつて原水爆政策は容易に進められる結果となるであろう。」という点をはつきり確認しなければならない。

ハバヒロイズムからの脱却を

出た事実はいささかもない。このことは取材者である毎日新聞用石運信部の清田記者みずからが認めている。このように根拠無もないデマをテツチあげるにおよんでは、この記事と全く一方的な作意があると断定せざるを得ない。

私たちはこうしたジャーナリストの行為こそが明らかに政治的意図を持つて全市民、全国民の平和への願いとはたらきかけに水を差し、それを破壊する意図をもつているという事実を指摘して断固抗議するものである。

○…この声明文が言つているように、この記事がまつたくのねつ造だとすると恐ろしいことである。自民党の今度の大会に対する中傷の偽大なる片棒かつぎを毎日が堂々とやつているのである。中立公正、真実の報道などと言うのはもはや空中楼閣で、ここにはある種力におもねつてある意図のもとに作文した御用新聞の姿しかない。こうしたことを裏づけるかのように同じ毎日新聞の七月二十三日付の朝刊に「原水協に圧殺を促す」という社説をのせている。

――安保条約阻止問題が現在国論を二分する重要な政治問題である以上、それを取り上げる大会には人道的な立場から賛成する人でも安保条約改ものであるかのような妄言を吐いている。〝政治問題を取りあげるな〟〝アカだ〟〝人道主義にかえれ〟などと右翼とともにこの大会を妨害し続けた自民党の姿勢とこの毎日の姿勢とどこがどれだけ違うだろうか。アカと言わないで〝左翼〟という言葉を使い〝祈願する〟純真な人々〟などという内容のないデコレーション用語を使つているにすぎない。一体新聞はだれのためにこの社説を書いたのか。

○…新聞代値上げにともなう増ページ以来新聞はつまらなくなつた。警職法攻撃を境に新聞の政府に対する論調が軟化して来た。などと最近とくに著しい変貌をみせている商業新聞に対する風当りがきびしくなつてきている。現状の日本において、三大新聞をはじめとする商業新聞の果す機能、とくにその国民に与える指導性、誘導性が重要な意味をもつていることを考える時、これら新聞の偏向ぶりを見逃すことは出来ない。

○…今年の原水禁広島大会で明石市の原水協理事会から次要次のような抗議声明文が出された。

――八月三日付の毎日新聞全国版に明石原水協理事長（代理）談として「原水爆に反対し、核武装の阻止にむけられた運動が政治色をおびたために明石では行きづまり脱会者が出て資金援助をする者すらなくなつた。」と伝え、さらに市当局がさる三十一日「派遣補助金を拒否した」市民の間にも「安保闘争がからんでは出てこないで来たり「恋に」みられる」と資金援助をとりあるものもてている……などともつともらしく報じている。

だが、そうした事実は皆無である。理事長代理もそのような発言は一言もしていない。また、現在このような形で資金援助をとどこおられ脱会者の出た事実はいささかもない。

ここにはある種力におもねつてある意図のもとに作文した御用新聞の姿しかない。こうしたことを裏づけるかのように同じ毎日新聞の七月二十三日付の朝刊に「原水協に圧殺を促す」という社説をのせている。

――安保条約阻止問題が現在国論を二分する重要な政治問題である以上、それを取り上げる大会には人道的な立場から賛成する人でも安保条約改定賛成者であれば支持できるはずがない……原水協がいまにして反省しなければ完全に左翼のための運動になり、真に人道の名において核兵器禁止を祈願する純真な人々を狭くことになる――

○…社会のトリビューンであるはずの大新聞が「安保改定賛成者であれば」などと暗に安保改定を認めるようなニュアンスを漂わせ安保と原水禁は無関係なように作られているのか明白ではないか。

◎…原水禁大会の扱いにおけるこうした偏向ぶりは何も毎日だけではない。どの新聞の論調も大同小異である。

大新聞の中では最も進歩的で良心的だといわれていた朝日までが「保守党や防衛庁の一部に力の政策を真似た核武装のまほろしがあとを絶たぬ」（朝日八月六日社説）と指摘しながら「脱落した組織も行きがかりを棄てて一本の姿に立ち帰ることを考えてほしいものである」（同）と自民党も復帰させて政治問題ぬきでヒューマニズム運動としようと述べ「来年の記念日には再び原子雲立つことのない空を仰ぎながら、広島の犠牲はついにムダでなかつたと言き人に告げたいものである。」（同）とセンチな気分だけを強調し、一見もつともらしい筆はこびで、結局は自民党のいうようなものにこの運動を方向づけようとしている。このように大新聞はお得意の誘導術を使いながら、権力の宣伝機関化してしまうという危険な傾向をみせているのである。

権力の宣伝機関化

――原水禁論調――

裁判批判について

――松川事件に関連して――

岡林辰雄

一、政治的傾向的裁判にたいする民主主義の勝利

八月十日最高裁判所で松川事件の有罪判決が破棄差戻しになつた。私たちは、これを松川の勝利への一歩前進であり、「戦後日本人民が民主主義をまもる闘争において勝ちとつた記念碑的な勝利である」（八月二日「アカハタ」主張）と考える。

二、政治的傾向的裁判とマスコミ

十年前の八月十七日に東北本線松川駅の附近で夜行列車が脱線てんぷくし三名の労働者の命がうばわれたとき、それは国鉄労働組合に関係のある共産党員のしわざだとされていた。――事故の発生する二カ月前から、どこで、どういうことがおこるかわからないが、事故があれば、それはかならず共産党のしわざであり、国鉄労組が十万人のくびきりに反対してやることにきまつている、というふうに考えられていた。毎日の新聞やラジオがそう言つていた。

事故の一カ月前に下山事件がおこつたときにも、そうした方向が怪しいとされた。つづいて三鷹事件がおこると、内閣警理大臣は直ちに、「定員法に反対する共産主義者のしわざだ」という談話を発表した。

松川事件がおきると、待ちかまえていたように、内閣官房長官が「三鷹事件などと同じ思想的底流の兇悪犯罪だ」という談話を発表した。一カ月ほどたつてから被告諸君を逮捕しはじめた捜査当局は「真犯人であることにまちがいはない、確信がある」と、たびたび発表した。被告諸君は数回にわたつて虐訴されたが、そのたびごとに検察官は「確信がある」と発表した。

警察や拘置所の虐待くしが放して閉じこめられていた被告諸君は一切の面会、交通を禁止されており、官製言論の攻撃にたいし反論する機会は絶無であつた。

反駁ところではなかつた。いかなる具体的事実を疑われて服調べられたのか、いかなる具体的事実を理由に裁判にかけられたのか、ということすら、わからなかつた――弁護人とも同様であつた。

ただ「名数名と共謀して」松川列車てんぷくをやつたと起訴状に書いてあるだけなのだから「やらないと」という以上は、いつたい何から、死刑判決を宣渡すまでになつた。わずかな良心さえもマヒしたけが「二審裁判所の仕事だ。裁判官の心を売つたし、裁判の独立公正も独立も崩壊も何もあつたものだ。そこでやつたことにして、もつともらしくリクツをつけたけが「二審裁判所の仕事だ。裁判官の心を売つたし、裁判の独立公正も独立も崩壊も何もあつたものだ。

三、裁判批判と民主主義

戦争前には裁判批判は行なわれなかつた。治安警察法、出版法、新聞紙法などの法律で禁止されており、それをやれば処罰された。事が落着いたあとで「法律解釈」の問題として学者が「判例批評」をやるくらいのものだつた。

四十九年前に当時の社会主義者幸徳秋水ら二十四名が死刑の判決をうけ、十二名は直ちに死刑を執行された。それが無実の罪であることを知つている人々はたくさんいた。四十年もたつてから、骨も朽ちはてた戦後になつてようやくそれらの資料が世に出はじめた。松川事件を象徴として広津さんの文章から、裁判批判が問題になりだしたとき「判決が確定してからならよい、審理中の裁判の批判は裁判官の心を売つたし、裁判の独立公正も独立も崩壊も何もあつたものだ。

（二面より続く）

運輸・車輌　太洋自動車（1）・山田自転車工場（経20）・千代田モーター（1）・京浜急行電鉄（経3）・小田急電鉄（経1）・天竜木下運輸（経3）・鹿児島マツダ（経5）・ミツワ自動車（経10）・京王帝都電鉄（経2）・東急（1）・東武鉄道（経3）・日本通運（経5）・東京日産自動車販売（経15）・西武鉄道（経3）・島根トヨタ自動車（1）・富士山麓電気鉄道（5）・東宮日野ルノー（5）・西武運輸（経4）・三井船舶（1）・東新モーター（1）・日本技術（経2社1）・三重交通（経2）・ダイハツ工業（経2）・プリンス自動車販売（1）・小湊鉄道（経5）・東洋冷蔵（1）・エンパイヤ自動車（1～2・）・相模鉄道（経2）・東京トヨペット（経2～3）・中村自動車工（経2）・志村タクシー（1）・山形交通（経5）・万才自動車（経2）・東京急行電鉄（経3）・京成電鉄（経3）

乳食品　不二屋（経5化1）・森永乳業（経3）・東京飲料（文科系6～6）・芝浦精糖（経2）・日本冷蔵（経3）

土木・建設　日立工事（経1）・清水建設（経3）・丸田工材（経3）・東北開発（経2営2）・大和建設（営）・戸田組（経2）

繊維・紙業　竹屋洋紙店（5）・東洋ナイロン編物（経2）・服部紙店（経社5）・宮寺石綿（経化）・東京アセテート（経2）・東邦紙業（10）・市川毛織（経）・東洋セーイ（経2）・草木編織（経6）・双葉コーン紙（化）・中部衣料（経5）・東洋レーヨン（経5）・倉毛紡績（心2）・万常洋店（経）

報道・出版・放送　夕刊フクニチ新聞社（文2経2社2）・ジャパンタイムス（編集3業務3）・東京新聞社（15）・北海タイムス（経文社5）・時事通信社（1）・北海道新聞社（1）・旺文社（2女子可）・学習社（経文理）・日本経済新聞社（編集10営業5大学院可）・朝日新聞社（1）・長崎放送（男アナ）・文芸春秋新社（10）・札幌テレビ（営業編集各3女子アナ）・日本テレビ放送網（男アナ）・福島民放社（5）・学生社（英数）・毎日新聞社（1）・大阪読売新聞社（5）・中部日本新聞社（1）・報知新聞社（5）・読売新聞社（10）・共同通信社（10女子可）・日本教育テレビ（放送2事務3）・ラジオ東京（1）・電化学工業通信社（経）・河北新報（社2）・日刊工業新聞社（1）・大分合同新聞社（1）・医学書院（1）・日経新聞（6）・講談社（5）

興行・観光　東映（5）・富士観光（20）・日本交通公社（経1）・松竹（1）・江ノ島鎌倉観光（文科系）・日本旅行会（経）・日活（1）

公官庁　日本電信電話公社（20物2～3）・日本国有鉄道（経15）

その他　海文堂（文科系）・オリエンタル弘報社（英）・中央調査社（1）・博報堂（男15女5）・交英堂（経）・菱光社（英女2経2）・日理研究所（1）・法革倶楽部（1）・三笠社（10文科系）・読売広告社（1）・電源開発（物理数学事務）・サラカス館（経社5）・日本ロール製造（経）・共和応用物理研究所（物2～3）・くいだおれ（2）・所芳樹会計事務所（経英日文2）・保谷クリスタル硝子製造所（経3）・文祥堂（経3社2）・東宝食堂（経2）・勝紙（1）・和光堂（経2）

書くのが楽しみ
書く字が生きる――
精密なペン芯の働きでいつでもインキがスムースに出ます。そのため書きよいペン先が楽しいリズムにのつてすべります
その上デザインが豪華ですから、書き味が一段とデラックスです。
Sailor セーラーデラックス
¥1000～5000
学生向実用型 ¥250より

ポピュラー喫茶のNO1 マイアミ
新宿駅中央口前武蔵野通り 電話(37)四九八二 九五七〇
名曲喫茶のNO1
クラシック古典と現代モダンを綾なす最高の建築デザイン
シネラマ音響
立体テープ演奏
新宿 名曲・珈琲 上高地
新宿歌舞伎町コマ通り
TEL(368)5315・5316

満洲の思い出を集めて
東京で一番旨い
餃子會館
(新宿) 歌舞伎町西武新宿駅前 (368)6603
(新宿) スケートリンク横味の街2階 (368)5491
(池袋) 南口東上線改札口前 (97)4985
(有楽町) 西銀座デパート地階売店
(芝公園) 東京タワー2階売店
(事務所) 東京都新宿区百人町2～57 (35)5417

池袋新名物 いま話題の 中國料理
二階御座敷・大小宴会応需
北京亭
夏の栄養不足の補給は当店で
¥50よりタツプリと味つて下さい
池袋西口駅前(旧豊島師範前角)
電話(97)9939・5201

総合ビタミン入りの
グットこい牛乳！
蛋白と脂肪をたつぷり含みコクとアト味のすばらしさが特長です
その上 総合ビタミンを加えてありますから 健康にかかせない牛乳とご好評です
ウルトラプロセス
森永A牛乳
森永乳業株式会社

アイススケートのシーズンです
さあ！滑りましよう……
9月12日より営業中
営業時間 朝9.30～夜9.30
新宿 東京スケートリンク
新宿・娯楽センター・歌舞伎町 TEL(368)1183
滑走料金
大人 100円
学生 80円
小人 40円
貸靴 50円

あなたの運転免許は
完備した設備で確実な技術を!!
公認 実地試験免除・卒業証書発行
豊島自動車練習所
国電・都電・地下鉄（池袋東口五分）
東京拘置所横 TEL(97)6262・8090

戦後右翼の性格と動向

―平和勢力への保守陣営「尖兵」―

野村浩一

戦前右翼の成立基盤

過日の広島における原水爆禁止世界大会で、右翼が暴力的動きを示したという報道は、それが世界大会という、いわば国際的な舞台であっただけに、一層世人の関心を集めたように思われる。その後、いくつかの新聞や週刊誌にこの問題に関する論評があらわれたことは、この事実を物語っているといえよう。右翼の、こうした動きは、勿論今に始まったことではないが、特に岸政権成立以来いよいよ活発化しつつあるということができる。では一体、戦後の右翼は、曾てウルトラ・ナショナリズムの尖兵であった戦前右翼に比べて、どのような特徴をもっているのであろうか。また現在における右翼の社会的基盤や機能は、いかなるものであろうか。

この問題を考察するためには、さし当って二つの面から戦前と戦後の政治情勢を考えてみるのが適当であろう。先づ国内政治について言えば、戦前の日本はいうまでもなく天皇制国家であった。一切の権力と価値の根源は、少くともタテマエとしては、天皇の手にあった。換言すれば、天皇シンボルは、ここでは文字通りオール・マイティであった。従って戦前右翼が常に絶の御旗として持出し、且つ最も有効な武器であったのは、まさに、この天皇シンボルに他ならなかったのである。ロンドン条約批准における「統帥権干犯」問題や、「君側の奸を払う」という右翼の常套語をみれば、この間の事情は余りにも明瞭であろう。第二に、国際政治的には、この天皇制国家は、強力な軍事力を備えた極東における帝国主義国家であった。そこには、天皇制イデオロギーに武装された軍隊と、八紘一宇という団体シンボルが存在していた。これが戦前右翼に対して、恰好な地盤を提供していたことは、いうまでもないであろう。

いま、こうした戦前の状況に対比するならば、戦後右翼の当面している事情は顕著的に相異しているといえる。

戦前右翼とは断絶した、混迷する戦後右翼

天皇はもはや、嘗ての如きキイ・シンボルの位置を占めることは到底できないし、また、戦前右翼が常にそれと結びつくことによって多かれ少なかれ、自らの勢力を拡張してきた軍部は、少くとも戦前のような形では存在しない。換言すれば、戦前の右翼が拠り所としたものは、敗戦と共にほとんど崩れ去ったといえる。そうして、かかる情勢に代って出現したのは一敗戦後十四年の歴史を通観するならば一国内的にはタテマエとしての「民主主義」シンボルの流通と国際的には、米ソ二大陣営の対立という政治状況の中での親米反共という立場であった。従って、すでに曾々指摘されているように、ここに戦後右翼特有の困難、矛盾が胚胎することになった。すなわち、新憲法を拠り所とする民主主義理念の流通は、右翼が正面切ってこの理念に挑戦するには、すでに余りにも巨大な潮流として浸潤しつつあるし、何よりも先づ、曾ての天皇の如き、カウンター・シンボルを見出すことは、現在の日本においては、ほとんど不可能に近い。そうしてまた、戦前右翼が最も効果的に動員したナショナリズムは、現在の全面的な対米従属という状況にあっては、まさに両刃の剣となる必然性をもっている。ナショナリズムの上に立って反ソ反共を呼号することは、日本全土にアメリカ駐留軍が散在する現状においては、直ちに反米ナショナリズムをも誘発せざるを得ないであろう。換言すれば、曾て天皇―国体観念によって、国際的、国内的に一応の首尾一貫性を保持していたナショナリズムは、いまや全く分断された状況にあるといってよい。津久井龍雄のように、新中国に大きい関心を示す「右翼・左派」が現われるということは、こうした矛盾、混乱を最も象徴的に示している。

したがって戦後右翼の混迷は、何よりも先ず、このシンボル欠如の中に由来するといえるであろう。このような視点からみるならば、最近伝えられる「暫日本協議会」の結成は、注目に価する。安部新基、木村熊太郎、安岡正雄、北岡寿逸、鍋山貞親、大串兎代夫等を役員に並べたこの会は、第三の道を標榜して「日本哲学」を唱えているといわれる。それがどの問題であるとはいえ、その目指すところは、いづれにせよ、右翼イデオロギーの確立にあると考えてよかろう。

保守政権と右翼と平和勢力

だが革新勢力もまた、戦後十四年間を無為に過したわけではない。この間に培われた民主主義の諸勢力は、前者の動きに対して、烈しい反体制のエネルギーを内包している。従って保守政権が自らの政治目的を遂行するためには、反体制勢力の分断、抑圧が急務とならざるを得ないであろう。そうして差当っての右翼の役割は、まさにこの政治的分断にあるといってよい。しかも反体制勢力を分裂させるためのエネルギーを高めることによって、保守独裁体制を完成することが、岸政権の使命であるとするなら、この政権下における右翼諸勢力の活発化は、当然であろう。広島の事件に呼応するかのように自民党の七役会議が母親大会を「左翼勢力と不可分の関係にある」ときめつけたことは、こうした関連を関連を暗示している。言いかえれば、両者は恰も本隊と尖兵のごとく、陰に陽に関連しながら、民主勢力の抑圧を目指しているといえよう。

しかも、このような右翼の活動において特徴的なことは、先述したようなカウンター・シンボルの欠如を反映して、一応は平和主義を分裂させるというやり方である。「擬装平和にだまされるな」というフレーズは、このことを直截に物語っている。ここでは、真の平和と偽装平和というキャッチフレーズによって、まさに平和主義そのものの内容を分裂させようとする。それは護憲主義―多数決を口実としつつ、野党を押えつけようとする保守党と、まさにパラレルである。

このようにみてくるならば、戦後右翼の権力に対する従属性は、きわめて濃厚であるといわねばならない。それは「下からのファシズム」といわれるナチスはもとより、戦前の右翼に比してさえ、権力に対する抵抗性は稀薄であるそうしてかかる事態が、第二次大戦後のネオ・ファッシズムと称せられる諸事情に深く規定されていることは、いうまでもないであろう。

現在のところ、右翼の動向は、その派手な演出にもかかわらず、なお一般には「右翼のいやがらせ」として受取られている。だが単なる「いやがらせ」が、もはや不愛になる時は、反動の気流が重々しくたちこめる時であろう。もちろんそうした情勢がドラスチックな形で現われることは、国際的国内的諸条件からして、おそらくあり得ないと思われる。だがそれ故に、民主主義と平和を擁護し反動の芽を一つずつ、つみとって行くことが最も重要な課題となるであろう。（筆者・本学法学部助教授）

生活を支える信仰

（FOX映画）「アンネの日記」

人が毎日同じ顔ぶれをみ、単調な生活をつづけることは想像に絶する苦しさである。十三才から十六才にかけての青春期をナチの圧迫から逃れ、暗い生活に追い込まれたに拘らず夢を追いながら苦しみを克服して生きたというアンネの意欲はどこから生じたものであろうか。

常識的だが料見の狭い母親に対して、インテリであり地位もある父親が常に彼女のよき理解者であり助言者であったということに対するアンネの信頼が強かったことにも起因しているが、勇気凛冽という屈伏の多い時代を戦火と圧政の中で通した彼女がきづきあげた信仰。それが彼女の身上であり、また、夢でもあった。

信仰心というものは絶対的に追いつめられ、何かにすがりたい何かに憧れたいという時に特に強くなるものである。彼女の場合もまた、ギリギリまで追いつめられ自由に憧れ自然に憧れた結果のものである。彼女は人間は総て善であるという信念の下に信仰を持っていた。その信念は、自由と食糧に欠乏し、明日の運命がわからずに逼迫している人間がエゴをむき出しにして赤裸々な姿でぶつかりあい、恥も外聞もかなぐりすた、動物にかえったような生活の中で苦悩しながらやっと見出したものであった。

人間を善だと信じどんな、苦に寛容と簡単さで純粋に判断してきたことが彼女の生活意欲のみなもとともいえるのである。どんなに強い信念を持っていても人間はどうしても孤独には勝てないものである。誰かに相談し、理解しあうということが必要になってくる。アンネはそれを同年輩のペーターに求めた。二人は、お互いに恋するようになるが、彼女にとってペーターは考え方が消極的、悲観的でありすぎた。この彼女達の恋は、シルエット風に映じたした幻想的なカメラと流れる音楽とによってことさら美しく描き出されている。

（KYO）

小説概念変革の試み

『嫉妬』

ロブ＝グリエ　白井浩司訳　新潮社

菅野昭正

十九世紀のフランス小説は、ひとつの固定した型をつくりあげたといわれている。じじつ、バルザック、フローベール、その他誰でもいい、十九世紀の大作家の作品をみればただちにわかるように、日常的な世界に近似した環境を仮構して、そのなかに生きるひとり（または数人の）人物と外界との接触の剛を描くところに共通の特徴がある。しかも、外なる環境はいつも、特定の人物の心理によって解釈され、主観的な視線を通して描写される。そして、こうした固定化した小説形式は現在もまだ強い支配権をふるっているのである。

だが時代の移りかわりとともに人間と外界との接触の仕方はしだいに変質する。だから伝統的な小説を変革しようとする試みは、かなり以前から度々くりかえされてきた。

そして、ここ数年来この動きはますます活発になったように見受けられるが、いうまでもなくそれは伝統的な小説がアクチュアルな意味を失ったという判断が次第に一般化したからに違いない。ナタリー・サロート、ミッシェル・ビュートル、アラン・ロブ＝グリエなどをこの動向の推進者としてあげることができよう。これらの作家たちは〈アンチ・ロマン〉の担い手として一括して紹介されているが、むろん共通の旗印のもとに統一的な運動をすすめているわけではない。伝統的な小説の否定という点ではたしかに共通点はあるが、それを克服するための方法はそれぞれにかなり異ったものである。つまり現在の状況において、われわれの主体と外界（むろん他者をもふくめて）と、あるいは意識と外界とがどんなふうに結ばれるか、その把握の仕方の相違に応じてかれらの作品は独自の相貌を示すわけだ。

そのうちのひとり、ロブ＝グリエは外なるものも他者の行動も、われわれの意識によって単にそこにあるだけだ、という立場をとり想ないと思われる。だがそれ故に、民主主義と平和を擁護し反動の芽をつぶす。（筆者・本学法学部助教授）

多角的な視点から描写

尾崎士郎著「大逆事件」

菅野昭正

十九世紀のフランス小説は、ひとつの固定した型をつくりあげたといわれている。じじつ、バルザック、フローベール、その他誰でもいい、十九世紀の大作家の作品をみればただちにわかるように、日常的な世界に近似した環境を仮構して、そのなかに生きるひとり（または数人の）人物と外界との接触の剛を描くところに共通の特徴がある。しかも、外なる環境はいつも、特定の人物の心理によって解釈され、主観的な視線を通して描写される。そして、こうした固定化した小説形式は現在もまだ強い支配権をふるっているのである。

だが時代の移りかわりとともに人間と外界との接触の仕方はしだいに変質する。だから伝統的な小説を変革しようとする試みは、かなり以前から度々くりかえされてきた。

そして、ここ数年来この動きはますます活発になったように見受けられるが、いうまでもなくそれは伝統的な小説がアクチュアルな意味を失ったという判断が次第に一般化したからに違いない。ナタリー・サロート、ミッシェル・ビュートル、アラン・ロブ＝グリエなどをこの動向の推進者としてあげることができよう。これらの作家たちは〈アンチ・ロマン〉の担い手として一括して紹介されているが、むろん共通の旗印のもとに統一的な運動をすすめているわけではない。伝統的な小説の否定という点ではたしかに共通点はあるが、それを克服するための方法はそれぞれにかなり異ったものである。つまり現在の状況において、われわれの主体と外界（むろん他者をもふくめて）と、あるいは意識と外界とがどんなふうに結ばれるか、その把握の仕方の相違に応じてかれらの作品は独自の相貌を示すわけだ。

そのうちのひとり、ロブ＝グリエは外なるものも他者の行動も、われわれの意識によって単にそこにあるだけだ、という立場をとり想ないと思われる。だがそれ故に、民主主義と平和を擁護し反動の芽をつぶす。（筆者・本学法学部助教授）

卒業論文拝見【3】

組合員の二重性格の分析

（社会学部）栗原幸太郎　白井貞夫

「労働組合意識の研究」

社会学部では卒業論文を必修としている。早いものは三年の春先から卒論のことを心にかけているしかしおそい学生は四年も師走の声を聞いてからあわてだすという。

社会学部には、産業関係、厚生福祉、新聞広報、職業指導、自治選択の五コースがある。それぞれが対象分野を異にし、方法論的にも違った問題をもっている。各コースの学生はまた興味も将来の目的も違う。それで卒論についても一般的な傾向を指摘することは困難だ。と産業関係コースの武沢助教授は語る。そこで今回はまず産業関係コースの卒論について、同助教授の意見を聞くこととした。

「多くの卒論は、いずれも貴重な努力の結実したものではあるが、率直にいって学問的な研究業績とはいいがたい」と同助教授はまずこう苦言する。「サイエンティヒック・リサーチとは組織的、体系的な理論研究にまで高めこまないかぎり、文献による産業関係研究はテキストブック編集のまねごとか、つぎはぎ作業にすぎなくなる。産業関係（産業における人的諸関係）の分野では、科学的研究にたえる文献資料そのものも少ないのだという。

社会学部の学生は、またフラスコや培養基のなかに研究対象を求めることもできない、夜おそくまで一人で実験にとりくむということは、せいぜい学生を実験対象とする心理学や社会心理学の基礎研究ていどしかできない。

とすると残されるのは、フィールド・リサーチである。産業のなかに入って、研究対象じかに四つに組むことだ。しかしそれも十何単位の学業や入試試験準備の片手間にやれることではない。また日本の社会では、学生の年の若さとして研究を行なっていくことが一つの解決の道である」

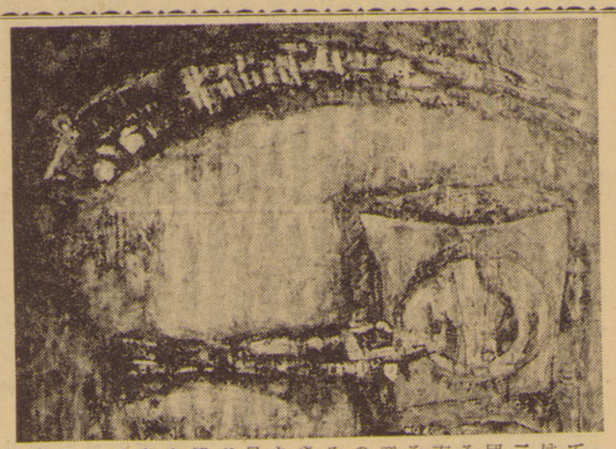
グループ展というものに対して私は、あまり大きな期待をかけることができない。たとえば二科、行動、新制作といった集団においても事態は同様である。思想の統一、作風の類似も方法論の共通性があるにしてそこには生活面の組織化への意欲がみられないし、また集団の感受性に向う有機的な姿勢をみいだすことはきわめてまれだからである。今日さしあたって必要なことは、絵画そのものの持つ効用性の回復ということであり、目的意識のアクチュアルな再認識だ、と私は考えている。

そういう観点から今度の展覧のなかでは、川口潔と佐藤豊章を高く評価したい。川口の作品は「魚によるイメージ」のヴァリエーションが四点、とどかくレエの絵を私に連想させたが、茫漠とした自然に反抗する作者の意図が抒情的に表現されていた。客観的な表徴に執する態度を川口に認めたい。佐藤はコラージュによる新たな造型創造の試みをしている。蝶を云えば、「悲しげな花」にみられるフォルムの不安定が気にかかる。

その他、岩間孝道は自己のミクロ・コスモスとは逆説的な関係にあるクリマを破綻のない色調で定着させ、斎藤泰弘は素朴ながらも一つの典型に対する不信を表現していて、何れもユニークである。森啓子はファンタスチックな表現に甘えているところがみられ、それが作品の上であきらかにマイナスになっているとおもう。その点で宮本克彦の作品は対照的である。

諷刺的な作品としては「十四年目に」他二点を出品した倉沼忠雄がメカニズムによって非人間化されている現代人へ批判と警告を発している。コミュニケイチブな作品が乏しい。あとのものは何れもタブロー画の形式に固執しすぎていて生気に欠ける。L・マンフォードの言葉をかりれば「人間が単なる動物として存続するための必要条件を顧えて、寛容と価値のある世界を自分で創造しよう」とする意欲がうすくみとることのできない作品が多いのは残念である。一考をうながしたい。

（立教美術展は十三日まで、池袋三越でひらかれた）



カットは川口潔「魚によるイメージ」

生活空間の組織化を

立教美術展より

書評

武沢助教授講評

栗原、白井両君の「労働組合意識の研究」は、都内K村の組合員一〇三七名についてその意識構造の分析を行なったものである。労組および従業員、組合員という二重的役割からくる矛盾感のおのおのについての調査を試み、それらの相互関係の分析を行なったことである。

調査のいま一つの要点は、経営者の企業、経営者、労働組合、同幹部に対する二体感、階級的団結意識についての調査を試み、それらのおのおのが一歩先に走って用意をかけ進むのだ。栗原君と白井君は、真理の探求のための犠牲をおいてくれたのである。

この結果、K社の組合員は、いわゆる経営者に属する事項と労働条件とについては、やや異なる役割を組合に期待していることが明らかとなった。

さらにいま一つのポイントは、東大法学部の瀬元美知氏の指導によって行なわれた、労働法社会学的な意識構造の分析である。これは労働組合と労働協約の本質について新しい光を投げかけているものといえる。

栗原、白井両君の卒論は、モノグラフとしてコンプリートなものではない。むしろこれから先の仕事をまたたれかがやらねばならない性質のものだ。しかし研究とは本質的にそのようなものだ。だれかが一歩先に走って用意をかけ進むのだ。栗原君と白井君は、真理の探求のための犠牲をおいてくれたのである。

この結果、K社の組合員は、いわゆる経営者に属する事項と労働条件とについては、やや異なる役割を組合に期待していることが明らかとなった。

さらにいま一つのポイントは、東大法学部の瀬元美知氏の指導によって行なわれた、労働法社会学的な意識構造の分析である。これは労働組合と労働協約の本質について新しい光を投げかけているものといえる。

栗原、白井両君の卒論は、モノグラフとしてコンプリートなものではない。むしろこれから先の仕事をまたたれかがやらねばならない性質のものだ。しかし研究とは本質的にそのようなものだ。だれかが一歩先に走って用意をかけ進むのだ。栗原君と白井君は、真理の探求のための犠牲をおいてくれたのである。

本年度ベルリン映画祭（ドイツ部門）金賞・最優秀監督・撮影技術賞に輝く！
NCC配給
壮烈第六軍！　34年度芸術祭参加作品
最後の戦線
ヨアヒム・ハンセン主演
ヘルブガング・ウェラス監督
ヒルデブランド・ウォスパー撮影
10月初旬ロードショウ
渋谷 パンテオン
新宿 ミラノ座
豪壮のスケールに独ソ大決戦を描く待望の戦争巨篇！
NCC

朝日新聞の夕刊英字紙
ASAHI EVENING NEWS
購読料　一カ月　¥300　お申込は朝日新聞販売店へ！

古典からモダンムードに至る
名曲を連日演奏！
★オーケストラタイム
平日　4時より
土・日・祭　1時より
―クラス会に最適です―
新宿　コンサートホール
地球会館2・3階　(37)9292

TOHO SCOPE
監督・脚本　岡本喜八
製作・田中友幸　撮影・逢沢譲
東宝系10月上旬一斉公開
東宝活劇大作
三鶴　船田　敏浩　郎二
ミッキーカーチス
中丸忠雄　中谷雄二郎
南道郎
江原達怡
夏木陽介
上原美佐
雪村いづみ
佐藤允
その名は掃きだめ守備隊！／黄塵荒ぶ北支最前線
機銃片手に賭博にふける明日なき野郎ども！
独立愚連隊